

JICHIKU

自治区

金野
石大
芸術
計画

記録

KANAIWA | ONO

ART | PROJECT

自治区
金石大野芸術計画
記録

本書について

金沢21世紀美術館では、2017年度より「自治区」という事業を立ち上げ、クリエイティブなマインドとコンセプトを掲げるアーティストとともに、実験的なプログラムを展開してきました。扱うテーマは美術に限らず、音楽や映画、演劇などさまざまな領域を横断し、トークシリーズや滞在制作、ライブなど、多様であったことが特徴です。そこでは「自治区」という名前の下に自主・自由・自立・自律であることが目指されていて、誰もが企画に加わり、実施できることが期待されていました。

「自治区」の取り組みの一つに、2018年度より始まった金沢21世紀美術館を飛び出した「自治区 金石大野芸術計画」があります。美術館から車で30分ほど離れた海沿いの町である金石・大野エリアに着目し、拠点となる「金石スタジオ」を構えました。「自治区」の考え方を引き継ぎつつ、アーティストが滞在し調査や制作を行うアーティスト・イン・レジデンス (AIR) や地域コミュニティを再発見し交流を推進するパブリック・プログラム (PP) といった、形式やジャンルに捉われない活動を行いました。

本書は、2018年度から2022年度までの「自治区 金石大野芸術計画」の記録集です。プログラムを情報として列挙するだけでなく、アーティストや地域の声を掲載することでさまざまな視点でこの事業を振り返り、この先の展開の一步を見つめます。この冊子が地域の中でアートと共に何か新しいことを起こそうとする方々のひらめきにつながれば幸いです。

金沢21世紀美術館

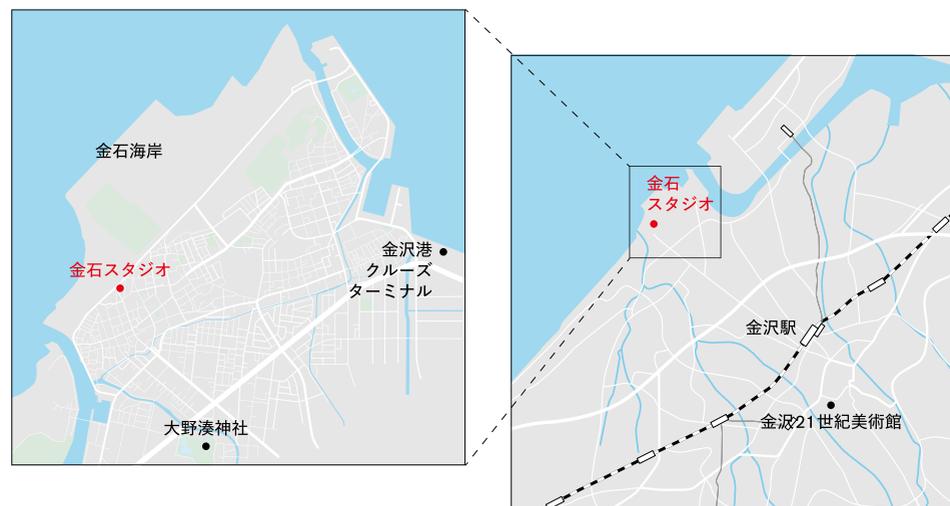
金石・大野エリアについて

金石・大野エリアは石川県金沢市の北西部に位置する港町です。かつて北前船の寄港地として栄え、加賀百万石を支えた豪商・銭屋五兵衛も輩出しました。2019年には金石・大野エリアのまちなみや歴史的建造物が日本遺産にも認定され、2020年には「金沢港クルーズターミナル」がオープン。新しい海の玄関口として注目を集めています。

海上交通の要所として栄え、外交上でも重要な役割を担っていた金石エリアは、当時の面影を残す町屋と、風格ある旧回船問屋が連続するまちなみを有しています。大野湊神社の夏季大祭は「金石の夏祭り」として市民に親しまれていて、神輿行列に曳山など、さまざまな民俗芸能を見ることができる金沢でも最大規模の祭礼の一つです。

海運業や漁業で栄えた大野エリアは、江戸時代に紀州から醤油造りが伝わり、今もお醤油蔵や町屋が連なるまちなみが残っています。醤油蔵を活かしたカフェやギャラリー、加賀の平賀源内とも言われた大野弁吉が手掛けたからくり人形が展示される「石川県金沢港大野からくり記念館」もあります。

金石・大野エリア



目次

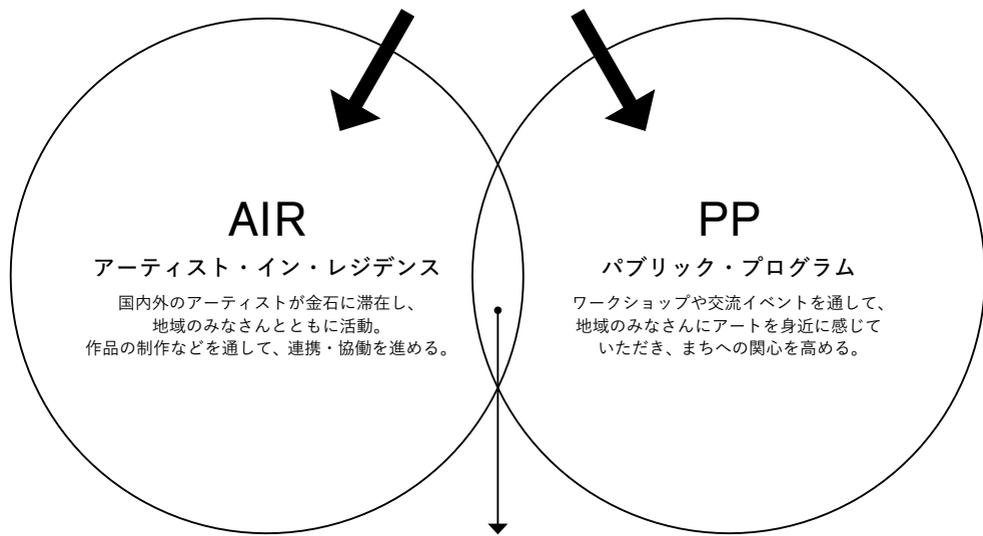
- 2 本書について
- 3 金石・大野エリアについて
- 6 自治区 金石大野芸術計画とは？
- 8 活動拠点 金石スタジオ
- 12 金石スタジオができるまでの活動
- 14 AIR 1：田口行弘／田口行弘&キアラ・チッカレッロ
- 20 PP：はま部
- 22 AIR 2：ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ
- 28 PP：にわ部
- 32 AIR 3：魚住哲宏+魚住紀代美
- 38 AIR 4：Co.山田うん
- 42 AIR 5：村上 慧
- 46 PP：まち部
- 48 地元の企業との連携事業
- 49 金石スタジオ通信／SNSでの発信
- 50 かないわ楽座
- 52 かないわ楽座を支えた地域コーディネーター
- 54 旧檜田堂
- 56 旧田村化粧品店
- 58 旧こうの
- 60 辻洋傘店
- 61 宮越緑地
- 62 宮野邸・商店街写真館
- 63 「声を聞く」
- 64 PP：展開
(週末コンテナ／週末コタツ／週末屋台)
- 68 金石で生まれたレシピ
- 70 東京理科大学 伊藤研究室との共同研究
- 72 論文：児童期の遊び場からみる地域の構造と変化～金沢市金石を対象として～
- 80 金石のまちに期待すること ー空間と社会の観点から
伊藤香織 (東京理科大学 教授)
- 84 イベントからふりかえる地域のまなざし①
このまちに住むわたしたちの展望
ー東京理科大学 伊藤研究室 ディスカッションシリーズより
- 87 イベントからふりかえる地域のまなざし②
プロジェクトの終了を前に ー「金沢21世紀美術館と本龍寺」より
梅原 顕 (本龍寺住職)×河合紗那 (自治区 金石大野芸術計画・地域コーディネーター)
- 90 対談：「自治区 金石大野芸術計画」は地域に何かをもたらしたのか？
観田康宏 (観田創建 代表取締役)×鶴山雄一 (加賀建設 代表取締役社長)
- 93 対談：これまでの金石とこれからの金石
鶴山庄市 (金石町校下 町会連合会会長／加賀建設 代表取締役会長)×能木場由紀子 (金石町校下 婦人会協議会会長)
- 98 金沢21世紀美術館「自治区 金石大野芸術計画」
黒澤浩美 (金沢21世紀美術館 チーフ・キュレーター)
- 106 金石・大野エリア地図
- 108 自治区 金石大野芸術計画 年表

自治区 金石大野芸術計画とは？

2018年度より、アーティストと地域が刺激し合い、新しい「何か」が生まれるきっかけとなることを目指して、広坂の金沢21世紀美術館を飛び出し、金石・大野エリアで活動を始めました。アーティストが金石に滞在し、調査や制作を行うAIR（アーティスト・イン・レジデンス）と、ワークショップや交流イベントなどの多彩なPP（パブリック・プログラム）を2本柱として実施しました。AIRとPPは明確に区切られずに、活動総体は両方の要素が混ざり合うものとしていました。この特徴は2021年度に金石の商店街の中で行った1ヶ月間のプログラム「かないわ楽座」にも見ることができます。活動の一部を地域の方に引き継ぎ、2022年度で金沢21世紀美術館の事業としては幕を下ろしました。



**KANAIWA ONO
ART PROJECT**



「かないわ楽座」(p.50-)の活動など

AIR

アーティスト・イン・レジデンス

国内外のアーティストが金石に滞在し、地域の方々と連携・協働しながら調査や制作を進めました。一般的なAIRでは滞在制作の後に成果展示が前提となることもありますが、「自治区 金石大野芸術計画」では展示をゴールには置かず、まちにやってきたアーティストがどのような活動や交流を生み出していくか可能性に期待したものです。

AIR 1：田口行弘 / 田口行弘&キアラ・チッカレロ →p.14

AIR 2：ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ →p.22

AIR 3：魚住哲宏+魚住紀代美 →p.32

AIR 4：Co.山田うん →p.38

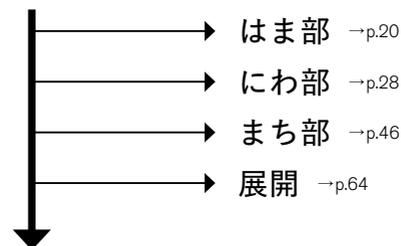
AIR 5：村上慧 →p.42

パブリック・プログラム

ワークショップや交流イベントなど、地域の皆さんにアートを身近に感じてもらい、まちへの関心を高めるプログラムです。また、活動の拠点となる「金石スタジオ」を構え、活動形態に応じて「はま部」「にわ部」「まち部」などに分かれて活動を行いました。そこから、地域の方々による活動も生まれてきました。

PP

PP

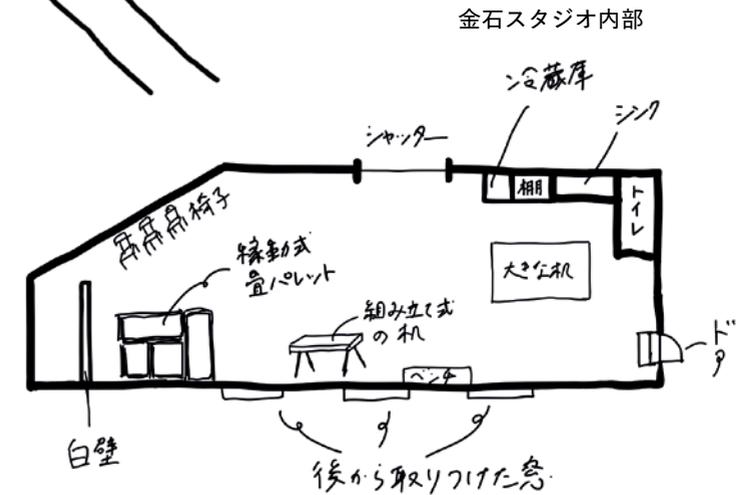
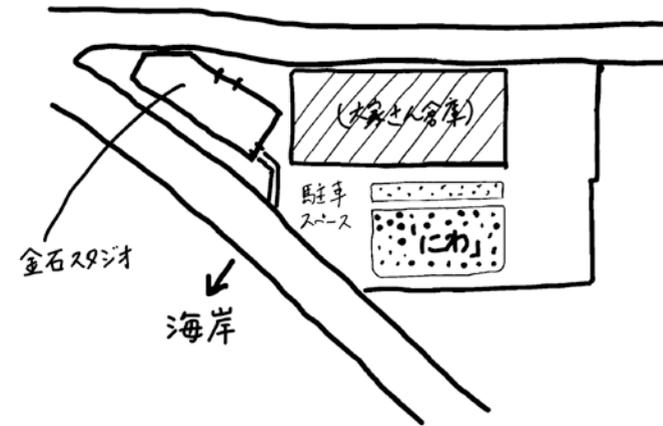


活動拠点 金石スタジオ

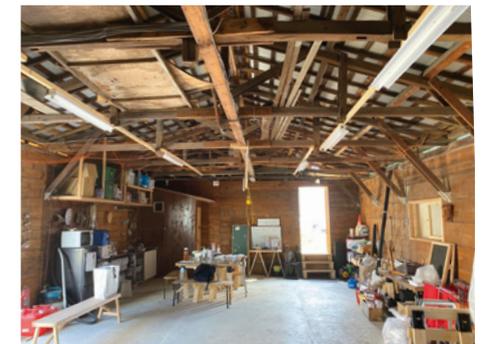
金沢21世紀美術館のある広坂エリアから金石・大野エリアまでは車で約30分。地域での活動を推進するためには拠点となるスペースが必要で、2018年に金石にスタジオを構えました。呼びやすく、地域の方にも馴染むようにそのまま「金石スタジオ」と名付けました。倉庫を借りて改修したもので、AIR（アーティスト・イン・レジデンス）やPP（パブリック・プログラム）で使用しました。バス停「金石」からも歩いて5分ほどで、金沢市街から公共交通機関を使って訪れることもできる立地です。風通しがよく季節をそのまま感じる構造で夏は扇風機、冬は石油ストーブで過ごしていました。土曜日を中心に地域コーディネーターがスタジオを開放していたほか、PPの一つである部活動「にわ部」（p.28-）のメンバーは自分たちで管理をしていました。こうした自由な使われ方がPPのさらなる展開（p.64-）へとつながりました。



金石スタジオ（金石松前町1-16）の敷地



スタジオ奥にはプロジェクションできる白壁が設置された



スタジオ奥からドア側を見た様子

●金石スタジオができるまで

2018年の春からのスタジオの場所探しでは、美術館スタッフが町の方々にお話を伺いながら金石の町を歩き回り、金石松前町の物件を見つけました。海にも近く、庭が作れそうな空地や車が止められるスペースが敷地内にあり、隣接した建物がなく人が集まりやすいことがポイントでした。物件調査を行い、大家さんと相談しながらついでに浜茶屋だった倉庫に手を加えることに。まずは、シンクやトイレ、出入口のドアを設置。土間のような床も、塗装をして明るい印象に変えました。憩いの場づくりのため食器類やポット、冷蔵庫などを用意し、トークやワークショップに使用するためプロジェクターを天井から吊り、テーブルや椅子を準備しました。スタジオオープン当初は海側の窓は開いていませんでしたが、採光のために後から手が加えられました。



通りに挟まれた立地で右手の防風壁の先は海岸



シンク・トイレ・出入口の扉を取り付けたばかりのスタジオ内

●金石スタジオ オープン！

2018年12月16日に金石スタジオがオープンしました。オープン時はAIR（アーティスト・イン・レジデンス）に参加中の田口行弘さんとともに、地域交流プログラム〈金石スタジオまつり〉を行いました。田口さんの映像作品を鑑賞する「みる」コーナー、地域の方が地元の味をふるまってくれる「あじわう」コーナー、漂着物で工作を「つくる」コーナーとスタジオ内は五感で楽しめる場所に。その後のスタジオの使い方の例になりました。



〈金石スタジオまつり〉の様子（左・中央）と地域のお母さん方による振る舞い（右）

●使いこなされていく金石スタジオ

スタジオは継続的に使われることで、自然とカスタマイズされていきました。木でできたパレット（荷台）を並べ、畳を乗せたらちょっとした小上がりに。靴を脱いで寛ぐことのできるスペースです。金石スタジオの外扉の横にある掲示板では手書きで近況や今後の予定をお知らせをされていて、親しみやすく情報を伝えています。



宽いだり、子どもが寝転んだりと便利な畳の小上がり



通りすがりの方にも情報を伝える掲示板

アーティストの生活拠点「金石ハウス」

AIRで滞在するアーティストの住まいは、金石スタジオから歩いて5分ほどの所に借りた二階建ての一軒家、通称「金石ハウス」。寝具、洗濯機、冷蔵庫、調理用具…と生活環境を整えていきました。プログラム開催後に金石ハウスで打ち上げをして、アーティスト自身が料理を振る舞うこともありました。坂道の少ない金石では、金石スタジオやスーパーに出かける時などに移動に便利な自転車が重宝されました。

アーティストと地域をつなぐ地域コーディネーター

美術館と金石・大野エリアは少し距離があることから、美術館との橋渡し役を「地域コーディネーター」に担ってもらいました。「金石スタジオ」「金石ハウス」の管理や運営、アーティスト滞在時のコーディネート、PP（パブリック・プログラム）の企画や運営、地域活動への参画及び地域での情報発信など内容は多岐に渡ります。金沢美術工芸大学出身のアーティストや、美術館の他の事業に携わっていたコーディネーター、金石出身で「自治区」に共感して参画したコーディネーターなどが歴任しました。

金石スタジオができるまでの活動

「自治区 金石大野芸術計画」がスタートした2018年度は、拠点となる「金石スタジオ」のオープン準備と並行して、地域みなさんがアートを身近に感じ町への関心を高めるきっかけになればと地域の中でワークショップを行うことから始めました。金石・大野エリアの特色ある場所をお借りしたり、アーティストと地域の方が交流する機会を作りながら、その後の展開を考えていた初期の頃の活動を紹介します。この後に「金石スタジオ」が完成すると、PP（パブリック・プログラム）として、「はま部」「にわ部」「まち部」と活動内容が分かれていく流れへとつながっていきます。



講師の戸出雅彦さん（左）と参加者

●ワークショップ〈思い出の陶板づくり〉

金石を再発見するイベント「かないわこまち」（主催：金石・大野まちづくり協議会 金石部会）に合わせお寺の境内で金沢を拠点に活躍する陶芸家を講師に招き、陶の角皿に絵付けしました。絵付け後は焼成して地域の銀行や信用金庫に展示しました。

日時：2018年9月8日（土）13:00-16:00
場所：妙覚寺（金沢市金石西2-14-3）
参加者数：20名
講師：戸出雅彦（陶芸家）



●ワークショップ〈思い出のカタチ、シルエットを染める〉

呉夏枝さんを講師に迎え、日光写真の制作手法で思い出の小物たちのシルエットを木綿布に青く染め抜きました。作家を交えたおしゃべりを楽しみながら染めた布地を「あづま袋」に仕立てました。

日時：2018年9月22日（土）10:00-12:00 / 13:30-15:30
場所：大野・築百年の町家（金沢市大野町4-84）
参加者数：12名
講師：呉 夏枝（現代美術家）



染め抜いた布を町家の軒先に広げている様子



●ワークショップ〈漂流物ネームプレートをつくろう〉

地域コーディネーターの門阪翔大さん発案のPP（パブリック・プログラム）。参加者は流木を金石海岸で拾い、表札を作るワークショップを行いました。金石スタジオの東側の壁面にある大きな「KANAIWA STUDIO」の文字は、この時に作られました。

日時：2019年3月23日（土）13:00-15:30
場所：金石スタジオ
参加者数：15名



流木でつくった「KANAIWA STUDIO」の表札



AIR 1

田口行弘 / 田口行弘 & キアラ・チッカレッコ

●滞在期間

第1期 2018年9月25日～11月9日 (田口行弘)

第2期 2018年11月26日～12月18日 (田口行弘)

第3期 2019年8月23日～11月9日 (田口行弘 & キアラ・チッカレッコ)



2018年秋から冬にかけて金石に滞在した田口行弘は、日本海に面した金石の海岸の風景と、そこに流れ着いた漂流物と出会ったことを契機としてこの地での活動を始めた。金石での日常、あるいはトークプログラム等を通して地域住民との接点生まれ、さらに漂流物をメディアとして彼は活動を深化させていく。

海岸での漂流物集めは、田口個人の活動から、地域コミュニティとの協働へとつながり、漂流物を組み上げた構造物「居場所」となった。この「居場所」を拠点として、金石に住む人たちが自発的に寄り合い、ワークショップやライブが開かれ、夜には焚き火を囲んだ交流の場が形成された。この活動の一端は「金石スタジオまつり」で映像として披露され、のちに作品として発表されている。

続く2019年には、田口とパートナーのキアラ・チッカレッコとのデュオでの活動「Discovery in Kanaiwa」へと拡張された。2013年、彼らは、ベルリンの街中から廃材を集め、巨大な空地に運び込んで小屋を建てて生活し始めたのだが、そのまわりにはさまざまな国籍をもつ150人以上からなるゆるやかなコミュニティが形成された。このプロジェクト「Discovery」は2014年秋、ベルリン市当局によって強制退去となるが、2019年、田口とキアラは小屋の資材を金石の海岸に運び込み、住民とともに再建し、コミュニティの新たな「居場所」として再生していった。彼らの活動は住民にとって、長らく不可視の場であった海岸の再発見であり、同時に土地の所有、ゴミといった地球規模での人類が抱える問題の縮図として、極めて示唆的であった。[NK]

●実施データ〈第1期〉

①トーク

〈田口行弘さんから金石のみなさまにごあいさつ〉

日時：2018年10月8日（月・祝）16:00-18:00

場所：金石町公民館講堂

参加者数：32名

②トーク

〈田口行弘 活動紹介〉

日時：2018年10月22日（月）18:00-19:00

場所：金石町公民館会議室

対象：金石地域の町会長他、町会役員

参加者数：11名

③地域交流プログラム

〈益社会との協働による漂流物収集〉

日時：2018年11月8日（木）7:00-8:00

場所：金石海岸

参加者数：12名

④地域交流プログラム

〈漂流物と火を囲む〉

日時：2018年11月8日（木）17:00-20:00

場所：金石海岸「居場所」*田口氏が制作した漂流物による構造体

参加者数：19名

⑤ワークショップ

〈漂流物で楽器をつくる〉

日時：2018年12月2日（日）13:00-15:30

場所：金石海岸「居場所」

参加者数：58名

⑥地域交流プログラム

〈金石スタジオまつり〉

日時：2018年12月16日（日）13:00-16:00

場所：金石スタジオ

参加者数：221名



金石スタジオができる前は
公民館を借りてトークを実施した



〈漂流物と火を囲む〉の様子



日頃から海岸清掃を行う益社会と漂着物を集めた



〈漂流物で楽器をつくる〉の様子

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

この海岸は普段から人がいないし、来ようと思う人しか来ないですよ。金石の人でもこの浜のことを知らなかった人が多いという事は、市街の人はほとんど知らないと思う。だから僕らが家とか建てて、「ここにいて何かしています」と情報発信をしていたら、「こんな場所が近くにあるんだ、ちょっと行こうかな」と思ってくれる人もいるかもしれないですよ。この場所の良さは、海、太陽、風、みたいな自然を感じられるところです。風景を見ながら、何もない暇な時間、ぼーっとする時間をあえて作ったら、自分の環境を見直したりいろいろ考えられるんじゃないかなと思います。

「アーティスト・田口行弘」(2019年10月号)

●実施データ〈第2期〉

①トーク

〈活動説明会

おかえり田口さん ようこそキアラさん〉

日時：2019年8月25日(日) 13:30-15:00

場所：金石スタジオ

参加者数：26名

②地域交流プロジェクト

〈Discuvry in Kanaiwa ムネアゲ〉

日時：2019年9月14日(土)、15日(日) 10:00-17:00

場所：金石スタジオ、金石海岸

参加者数：15名

③地域交流プロジェクト

〈Discuvry in Kanaiwa 踊る家〉

日時：2019年11月8日(木) 7:00-8:00

場所：金石海岸

参加者数：100名

④地域交流プロジェクト

〈Discuvry in Kanaiwa 漂流マーケット〉

日時：2019年11月2日(土) 11:00-16:30

場所：金石海岸

参加者数：205名

⑤トーク

〈Discuvry in Kanaiwa 活動報告会〉

日時：2019年11月9日(土) 14:00-15:30

場所：金石スタジオ

参加者数：10名



〈Discuvry in Kanaiwa 踊る家〉風景



Discuvry in Kanaiwa 活動報告会

田口行弘

TAGUCHI Yukihiko

1980年大阪府生まれ。東京藝術大学美術学部油画専攻卒業。2005年よりドイツ・ベルリンに活動の拠点を移す。ドローイング、パフォーマンス、アニメーション、インスタレーションが混然一体となった「パフォーマンス・インスタレーション」で近年注目を集めており、とりわけ公共空間において他者との関わりを誘発する作品は高い評価を得ている。2013年から14年にかけて、ベルリンのクヴリー通りにある空き地に廃材を集めて家を建て、翌14年に強制退去となるまでその地に住んだ。このプロジェクトは「Discuvry」として映像作品になり、また金石でのプロジェクトに接続している。

キアラ・チッカレロ

Chiara CICCARELLO

イタリア・シチリア島生まれ。カタニア大学で建築学の修士号を取得。ヴィンチェンツォ・ペリーニ・ミュージック・インスティテュートのピアノ科を卒業。2012年にベルリンに移り、建築家として働く。その後ドローイングとイラストレーションを中心に制作を続け、ドイツやイタリア、日本でもこれまでに作品を発表している。ベルリンでのプロジェクト「Discuvry」では、田口行弘の共同制作者として、構造設計や意匠等の面から関わっている。

Discuvry in Kanaiwa 漂流マーケットの様子



当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

「アーティスト・田口行弘」
(2019年11月号)

一ヶ月経って、一日一回はひよこつと訪問者が来るようになって、このプロジェクトっぽくなってきたかなと思います。「金石海岸にアクセントをつけてくるとか言ってくれるおじさんもいたし。」

PP はま部

PP (パブリック・プログラム) の中で地域を知り、考え、楽しむ部活動のような取り組みを立ち上げる際に、「にわ部」(p.28-)、「まち部」(p.46-)とともに「はま部」もその一つに加わりました。特定の部員は持たず、プログラムを開催する時に「はま部」とタイトルにつけ、その都度参加者を募集する仕組みとしていました。

金石スタジオ前に広がる金石海岸は、現在は防風壁に隔てられ人々の日常から切り離されていますが、かつては地域の身近な場所でした。AIR1で招聘した田口行弘さんが金石海岸で行っていた活動や、金石スタジオオープン時の金石スタジオまつりでの海岸にある漂着物を使った工作など、地域の特徴の一つでもある海岸に着目し浜を自分たちが使える場所として楽しむ動きは「自治区 金石大野芸術計画」の当初からありました。「はま部」では、漂着した木や貝殻を用いた作品制作などを通じて、あらためて地域の環境に意識を向ける機会を作りました。〈漂流物で何が釣れる？浜どれ！グットラックパーティ〉では地元の方の参加が多くある一方で、〈はま焼き！「はま文式土器」を作ろう〉では焼き物に関心を持った金石・大野エリア外の方の参加があり、金石海岸を外の地域の方に知ってもらう機会にもなりました。

●ワークショップ

〈漂流物で何が釣れる？浜どれ！グットラックパーティ〉

日時：2019年9月21日(土) 7:00-13:00
場所：金石スタジオ、金石海岸
料金：300円
参加者数：16名



「はま」で、小さなカニを獲ったところ

●はま部×にわ部 ワークショップ

〈クリスマス・リースを作ろう♪〉

日時：2019年12月14日(土) 13:00-14:00
場所：金石スタジオ
料金：100円(材料費)
参加者数：9名



漂着物や植物を使ってクリスマス・リース作りに熱中する様子



砂を掘り、風除けを作って行う「はま焼き」

●ワークショップ

〈はま焼き！「はま文式土器」を作ろう〉

①2020年10月3日(土) 10:00-16:00
②2020年10月25日(日) 10:00-16:00
場所：金石スタジオ、金石海岸
料金：1,000円
講師：戸出雅彦(陶芸家)
参加者数：16名



焼成前のうつわ

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

金沢で活躍をしている陶芸家・戸出雅彦さんを講師に迎え、金石海岸ならではの陶芸に挑みました。まずは金石海岸の砂浜を散歩して、陶土に混ざる砂や粘土に押し当てて模様を取れそうな貝殻やロープなどの漂着物を集めました。スタジオに戻り参加者は陶土と砂を捏ね合わせ、工夫をこらして形を作っていました。作品の乾燥後に海岸での「はま焼き」です。風の少ない所でトタン波板の上にブロックで囲いを作り、籾殻を敷き詰めて作品を埋め、上から籾殻と木炭をかぶせます。焼成は朝雨の影響で11時頃から日の暮れる17時ごろまで焼き上がりを見守りました。浜辺の秋の風と空、焚き火の炎などとともに、仕上がりの時間を楽しめた様子でした。

「金沢21世紀美術館エデュケーター・木村健」(2020年12月号)

AIR 2

ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ

●滞在期間

第1期 2019年2月1日～2月10日
第2期 2019年2月25日～3月15日
第3期 2019年7月28日～8月6日



韓国を代表するアーティスト・デュオ、ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ(以下、「ムン&チョン」)は、ユニットを結成した当初より「現代世界における芸術の社会的機能と役割は何か」を問い直すプロジェクト「News from Nowhere」を展開し、さらにさまざまな領域の専門家との対話と意見交換を介した協働のための実践的なプラットフォームを提唱してきた。こうした考え方をもとに、彼女たちは現代社会における諸課題を抽出し、作品を介してそこに生きる我々へとメッセージを投げかける。そうした彼女らの姿勢は、三度にわたる金石地区での滞在においてもさまざまなアプローチによって立ち現れた。

2019年1月より金石地区で滞りし調査を開始したムン&チョンは、映像作品の制作に軸足を置きつつも、同地区の過去と未来についてリサーチを進め、住民とのトークプログラム等を通じて、建築的、景観設計的なプロジェクトを試行した。その一つは、彼女らのデザインによるマンホール・カバーの設置であった。海辺の松をモチーフにしつつ、彼女らの代表作《世界の終わり》からの象徴的なセリフが刻印されたマンホール・カバーが制作され、実際に金石地区の三ヶ所に実装されている。

他にも、町と海とを分断する長い防風壁にギャップをつくり、遊歩道として利用することで、住民の海へのアプローチを担保しつつ、住民が行き交う新しい場をつくるプランや、漁港に浮かぶ廃船や上屋を改装し、ステージやマーケットとして再活用するプランといった、町の特性を活かしながらその機能拡張や風景の変容に言及する創造的なプランを考案している。

また、制作された映像は二度にわたる同地での撮影を経て、2022年に金沢21世紀美術館にて開催された彼女らの個展において、2チャンネルの映像作品《サイレント・プラネット》として発表されている。この作品では、遠い昔に金石に生きた人物の魂が描かれ、その視点は現在の金石を彷徨う。今を基点としながら、この場所あるいはこの世界の過去と未来を往還しており、忘れられた歴史と失われた暮らし、世界への哀れみと懐疑が考察された実験的な作品となった。

彼女らの三度の金石地区での滞在は、住民との交流やリサーチを通じて、こうした考察や作品制作へと結実しており、その成果が展覧会で発表されるなど、レジデンス・プログラムの動線としても充実したものとなったといえる。[NK]

●実施データ

①トーク

〈ムン&チョンがやってきた！
もっと教えて金石！〉

日時：2019年2月3日（日）13:00-15:00
場所：金石スタジオ
参加者数：46名

②作品制作

〈映像撮影〉

期間：2019年2月24日（日）～26日（火）
場所：金石地区（金石海原、金石港、金石温泉ほか）

③トーク

〈中間報告会！ムン&チョン金石での活動の、
これまでとこれから〉

日時：2019年3月10日（日）13:00-14:30
場所：金石スタジオ
参加者数：27名

④トーク

〈プロジェクト中間報告会
「お久しぶりのムン & チョン」〉

日時：2019年7月29日（月）19:30-21:00
場所：金石スタジオ
参加者数：20名

⑤作品制作

〈映像撮影〉

期間：2019年8月1日（木）～4日（日）
場所：金石地区（大野湊神社の夏季大祭ほか）



海岸での撮影



大野湊神社の夏季大祭を撮影



金石のためのマンホールの蓋



金石の歴史を地域の方がレクチャーする様子



金石のためのマンホールの蓋について話すムン&チョン

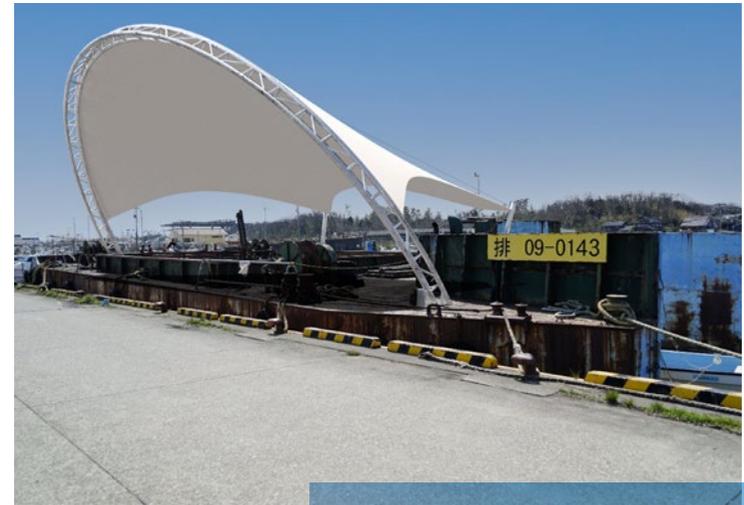


本龍寺でのロケハン

ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ

MOON Kyungwon & JEON Joonho

ムン・キョンウォン(左)とチョン・ジュンホ(右)によるデュオ。ムン・キョンウォンは1969年韓国・ソウル生まれ。チョン・ジュンホは韓国・釜山生まれ。最初の大規模な共同作品である《世界の終わり》を2012年のドキュメンタで発表。2015年にはヴェネチア・ビエンナーレ韓国館の代表アーティストに選出されるなど、異なる時間軸とその接続を映像世界として精緻に描き出し、明確なコンセプトと研ぎ澄まされた表現力、高い完成度が共存する映像インスタレーションによって国際的な評価を獲得し、「News from Nowhere」テート・リバプール(2018~19年、リバプール、英国)、「News from Nowhere: Freedom Village」韓国国立現代美術館(2021年、ソウル、韓国)など各国での個展を開催。また、「変容する家」東アジア文化都市2018金沢(2018年、石川)や「現在地：未来の地図を描くために」金沢21世紀美術館(2019年、石川)、「奥能登国際芸術祭」(2021年、珠洲、石川)、「ムン・キョンウォン&チョン・ジュンホ：どこにもない場所のこと」金沢21世紀美術館(2022年、石川)など当館や周辺地域での展示も多い。



ムン&チョンから提案された「金石港の廃船活用プラン」(左)と「防風壁の再利用プラン」(右)のイメージ



当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

アーティストと関わる事など無い生活をしてきた私にとって、とても興味深く楽しみな企画でした。ムンさん、チョンさんと初めてお会いしたのは、お二人が金石散策中に美術館の方と共にお寺へお寄り頂いたときだったと思います。お二人はとても穏やかで、外国語を一つも話せない私の話に熱心に耳を傾けられ、的外れな質問にも丁寧に答えて下さいました。その後、金石に滞在し作品を制作されていく中で、町の人たちと親交を深めていかれました。お二人は、金石に対し敬意を持って接し、町の歴史についてもよく勉強されていました。また、こういうことは地域の方に失礼はないかなど、いろいろ気遣いもされながら作品を制作されていたことを覚えています。

「本龍寺 住職・梅原顕」(2022年5月号)

PP にわ部

金石スタジオの敷地内の空地に、さまざまな交流を促進するための場として「にわ」を作り、「にわ部 部員募集」と部活動に見立てて一緒に運営するメンバーを募りました。活動条件は「ものや情報を他の部員と共有すること」。部員になると、スタジオとその横のにわ、道具を無料でいつでも使うことができます。「畑」ではなく「にわ」としたのは、収穫を目的とするのではなく自由に使えるあそびのある空間にするためです。一人一人の「やってみたい」や「つくってみたい」が集まって、いろいろなことを試せる場所、金石の土や気候、植物と触れ合いながら遊び場を作る活動を「にわ部」と呼びました。野菜や草花を育てることにとどまらず、自主的な活動のプラットフォームになり、ここからコミュニティが生まれました。メーリングリストやLINEグループで連絡を取り合えるようにし、黒板にどの畝で誰が何を育てているかを可視化、植えるものも各自持参で水やりや手入れも好きなタイミングとゆるやかな部活動です。ここから、金石スタジオへの親しみや自分たちの場所として活かしていく雰囲気が生まれました。

また、収穫したものや情報交換の場としてポットラックパーティ（一品持ち寄りのご飯会）を定期的で開催することで、交流が広がりました。交換の場所でもあったにわ部では、遠方に住んでいる部員がその地域の産物を振る舞ってくれることもありました。たけのこ・栗・ベリー・梅など、山の幸が届くことも。素材があると何を作るか、調理・保存方法などの情報交換にも花が咲きます。発酵食の文化が根付いている金石にちなんで畑で取れた白菜を使ってキムチを作ったり地域を丸ごと味わう機会もあり、メンバーが普段作っている料理を金石スタジオで紹介する「にわ部レシピ」も生まれました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた後はポットラックパーティは休止としていましたが「にわ部」の活動は地域に根ざし、続いていきました。遠出や人と会う機会が減った時期だからこそ、家庭や職場ではない近くの場所に「にわ」やゆるやかなコミュニティがある意義を感じるようになりました。



●畑びらき（説明会&苗植え）
日時：2019年6月8日（土）12:00-14:00
参加者数：24名

●苗植え&ポットラックパーティー

日時：2019年6月29日(土) 10:00-13:00
 場所：金石スタジオ
 参加者数：24名

●2019年度 月例交流プログラム

〈ポットラックパーティー〉

日時：①7月20日(土)、②8月25日(土)、
 ③9月28日(土)、④10月19日(土)、
 ⑤11月16日(土)、⑥12月14日(土)、
 ⑦1月18日(土) 各日 10:00-13:00

場所：金石スタジオ

参加者数：①27名、②21名、③18名、④24名、
 ⑤16名、⑥15名、⑦18名 (計139名)



ポットラックパーティーの様子

●交流プログラム

〈おすそわけ市〉

日時：2020年7月11日(土)、12日(日) 13:00-20:00
 参加者数：計129名

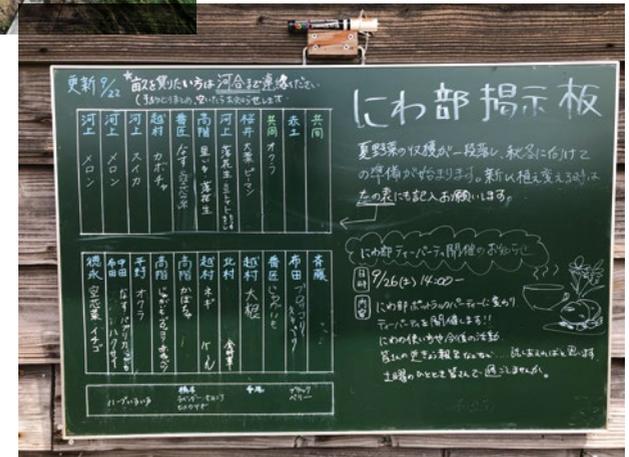


畝ごとに各々が栽培を楽しんだ

メンバーが作ったオブジェ



お知らせや近況が確認できる掲示板



当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

「にわ部参加のきっかけは、趣味の菜園がプランターでは手狭となった事からです。プランターと違い、畑だと多くの作物を育てる事が出来ました。食用ほおずき、落花生に加え、メロンにも挑戦。畑は浜風が強いので支柱を組んだ方が良かったと思っていった頃にスタッフの方から敷地にあった流木を分けて頂き、流木で支柱を組む事にしました。流木を使うと決めた時に思い浮かんだのは『人の手が加わっていない野良なメロン畑』(手を加えていないのに畑というのも可笑しいですが)。組んでみると、死んでしまった流木がメロンを纏う事によってメロンの木として蘇った感じがしました。今年は野良畑第2弾としてスイカも加えて畑を拡大。自分の園芸スタンスは過保護過ぎない事なので特に薬剤散布も行わず、ウリ好きの害虫が大量発生してすごい事になってしまいました。野良畑ですから仕方ありませんね(笑)

「にわ部メンバー・河上聖一」(2020年10月号)

AIR 3

魚住哲宏 + 魚住紀代美

●滞在期間

第1期 2020年6月2日～7月19日

第2期 2021年4月1日～6月24日



2004年から共同制作を始め、2007年よりベルリンに移り、現在も同地を拠点に活動を続けるアーティスト・デュオ 魚住哲宏+魚住紀代美は、国内外のレジデンスに参加し、その場で出会った物や音を拾い集め、再構成する作品を多く制作してきた。

金石では2020年から2021年にかけて、二度にわたって滞在。新型コロナウイルスの感染拡大により、期間の延期・短縮、金石地区での活動の制限などの影響を受けたが、独自のペースで住民の行動や街路に聞こえてくる生活音について調査を続け、長期的なプロジェクトとして「まち音企画」を構想。2020年の滞在では、ひと気のなくなった街路で、家々の窓に灯る光と零れ出る音が、唯一の街の中での人の存在を体感する要素であるかのように感じた二人は、路地に面した自転車店と空家（旧商店）の協力を得て、《まち音企画その1 K商店街につながる路地》を制作・公開している。コロナ禍で海外や遠距離の移動が困難となった状況において、金石地区だけでなくベルリンなどさまざまな土地で採集した音と窓の灯の明滅が同期する路地は、そこを歩く人々の記憶に介入し想像力を喚起することで、どこか別の場所へと瞬間移動するかのような新たな遊歩体験を促すものとなった。

滞りを終え、ベルリンに戻って以降も、二人は地域コミュニティへのアプローチを続け、住民からそれぞれの家の中で発生する生活音を募った。2021年の滞在では井戸端会議のように住人が道端で立ち話をする姿に着想を得て、《まち音企画その2 匿名の話をする》に展開する。「誰にも隠されていないけど誰の目にも触れていない町の風景」と、住民から募った音や国内外で採集した音を組み合わせたサウンド・スポットを金石町内各所に設置。二人は、作品に関する直接的、一括的な周知を行わず、それらの各サウンド・スポットの周辺の風景を描いたポストカードを近隣にポスティングすることによって、住民の噂話による情報の伝播を企図し、作品に包含している。

活動に制限が発生した滞在活動であったが、結果的にこれらのサウンド・インスタレーションは、コロナと共存せざるをえない時代における新たなレジデンス・プログラムのあり方を示唆するものとなったといえる。[NK]



まちの音を採集してまわる
《まち音企画その1 K商店街につながる路地》

●実施データ

①作品展示

〈まち音企画その1 K商店街につながる路地〉

日時：2020年7月1日（金）、11日（土）、12日（日）

各日13:00-20:00

場所：尾山自転車商会隣

参加者数：10日-83名、11日-153名、12日-115名 計351名

②トーク

〈アーティスト・トーク：魚住哲宏＋魚住紀代美〉

日時：2020年7月18日（土）14:00-15:30

場所：金石スタジオ

参加者数：30名

③作品制作

〈まち音企画その2 お家の音集めます！〉

期間：2020年7月13日（月）～10月31日（土）

④作品展示

〈まち音企画その2 匿名の話をする〉

期間：2021年5月19日（水）～6月20日（日）

*7月31日まで一部展示を延長

場所：金石町内各所

⑤トーク

〈アーティスト・トーク：魚住哲宏＋魚住紀代美〉

日時：2021年6月20日（日）13:00-15:00

場所：金石スタジオ

参加者数：22名



音と光を使った
サウンド・インスタレーション作品

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

街角のスケッチと日常音のレコーディングを行いながら金石を歩いています。この場所にどんな音を重ねると日常の暮らしの中に小さなズレを作り出せるのだろうか、そして日常の音に耳を傾ける時間を共有できるだろうか、「まち」をウロウロしながら、さまざまな形態の暮らしに溶け込むサウンド・スポットを計画中です。暮らしが積み重なる風景と暮らしから流れ出る音のコンビネーションは興味深く、一見関係性もなくすれ違う個々が、「まち」の風景と音の中では個々の尊厳を受け入れているように見えてきます。私たちは「まち」の中で多くの人や物がそれぞれの自分の物語をさまざまな声で語っていると感じました。時には人には言いたくない様なことを小さな声で物語っていることもあると思います。当然、「まち」で語られている物語は決して完璧ではなく、私たち聞き手自身の想像を重ね、引き出す必要があります。五月はこれらの体験を踏まえて「まち」の風景と聞こえてくる音に小さな変化を作り出そうと考えています。

誰の目にも触れる場所にあるけれど、誰の目にも止まらない匿名の話を広げていきます。普段の暮らしの中でいつもとは異なる想像を促したいと思います。

〔アーティスト・魚住哲宏＋魚住紀代美〕（2021年5月号）



金石スタジオの〈アーティスト・トーク〉



《まち音企画その2 匿名の話をする》
サウンド・スポットをめぐるツアー



近隣にポスティングしたカード



サウンドスポットとして設置されたポスト



金石スタジオにてサウンドボックスを制作

魚住哲宏 + 魚住紀代美

Kiyomi + Tetsuhiro UOZUMI

魚住哲宏は1980年愛知県生まれ。2007年愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻修了。魚住紀代美は1981年和歌山県生まれ。2004年京都造形芸術大学美術工芸学科彫刻専攻卒業。2004年より魚住哲宏 + 魚住紀代美として共同制作を始め、2007年より活動拠点をベルリンに移す。旅先やその道中で、あるいは日常の些細な出来事を集め、再構成することをテーマに作品を制作してきた。「変容する家」東アジア文化都市2018金沢（2018年、石川）に参加し、野町にある古い一軒家を使用した作品を発表。他にも、「中之条ビエンナーレ」（2015年・2017年、群馬）、「Open ART Biennale 2017」（2017年、エレブル、スウェーデン）といった国際展や国内外のレジデンスに参加し、その場で出会った物や音を拾い集め、再構成することで物と場の記憶を喚起するような作品を発表している。



AIR 4

Co.山田うん

●滞在期間

2020年8月19日～8月25日



2020年8月19～25日の1週間、コンテンポラリー・ダンスのカンパニー「Co.山田うん」のメンバーが金沢市内に滞在し、新設された金沢港クルーズターミナルで新作パフォーマンス「みぎわ」を披露した。

Co.山田うんは、コンテンポラリーダンサーであり振付家の山田うんが率いるダンスカンパニーで、本レジデンス・プログラムの中では初めてのダンサーの招聘である。コロナ下でダンサーたちは全ての公演が中止となり、練習場所も確保できず、各自が自宅でトレーニングを積むという生活を送っていた時期であり、この環境の中何ができるのか、何をすることがベストなのかというレジデンスの意味や意義をどう成果として見せるのが大きな課題としてあった。

ダンサー13名と山田うん、そしてカンパニーを切り盛りするスタッフの総勢15名の大所帯が金石レジデンスに滞在することは不可能なため、金沢駅近くのホテルに滞在し、金石に通ったり、稽古場として美術館のシアターを使うこととなった。

事前の下見で金石・大野エリアの海岸や町をゆっくり歩いて見て回った後、カンパニー側から出てきたテーマが「境界」であった。コロナ禍で改めて自分と他者との距離や境界を感じさせられたこと、港や海岸が陸と海、こちら側とあちら側との間に位置していることとの共振を何かしら表現できる場づくり、クリエイションをやってみようという提案だった。コロナ禍で地域の人と交流することもままならない現状で、カンパニーが地域との関わりを持つプロジェクトとして、この町を舞台にした映像作品の制作に取り組んだ。山田うんからこの映像作品は「金沢港と金石海岸、または大野を背景に、みぎわ（汀、水際）と題した境界線の物語」であると提案された。また、最終日に映像作品の内容をミニ公演として金沢港クルーズターミナルで発表した。

Co.山田うんはコロナ禍においてなんとか人と接触しないようにしながらも、金石・大野エリアをリサーチし、この地域のことを身体で感じるために海岸と港を使って作品を作り発表した。まだ地域やそこに住む住民たちとの直接的な交流は生まれていないが、このような状況下だからこそ考え、向き合った「境界」というテーマが、地域とアーティスト、あるいは地域と他者をつなぐ上でもとても重要な課題であることを改めて考えさせられた。

カンパニーメンバーは、次年度以降、少人数ずつで時期を変えて、実際にレジデンスに滞在する計画も立てていた。少しずつ時間をかけて地域と自分たちの間にある「みぎわ」に足を踏み入れようとしていたのだ。その時、金石の町はどんなふうにもその境界を揺さぶられるのだろうか。いつか見てみたい景色である。[NY]

撮影：下家康弘



ダンス・ワークショップ風景の様子

金沢港クルーズターミナルC1Qエリアでのパフォーマンス



撮影：下家康弘

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

「みぎわ」のイメージ通り、風が吹いていて波が打ち寄せるような、それでいて時に静けさもある浜辺のようで普段見ている地元の海を上手く表現されていて、どこか懐かしさを感じるようなパフォーマンスでした。当日は二度の公演でしたが、とても良かったのでどちらも見に行きました。
 「にわ部」メンバー・吉野大地
 (2020年10月号)

●実施データ

①地域交流プログラム

〈Co.山田うん ダンスワークショップ〉

日時：2020年8月21日(金) 19:00-20:30

場所：金沢21世紀美術館 シアター 21

参加者数：20名

料金：1,000円

主催：うんダンスぶらうる

②作品制作

〈金石パフォーマンス撮影〉

日時：2020年8月24日(月)～25日(火)

場所：金石海岸、金沢港クルーズターミナル他

③ダンス公演

〈金沢港パフォーマンス「みぎわ」〉

日時：2020年8月25日(火) 13:00 / 15:00

場所：金沢港クルーズターミナルC1Qエリア、岸壁等

参加者数：128名

料金：500円

振付・演出：山田うん

音楽：ヲノサトル

出演：飯森沙百合、川合ロン、河内優太郎、黒田勇、田中朝子、西山友貴、仁田晶凱、長谷川暢、望月寛斗、山口将太郎、山崎真結、山根海音、吉崎裕哉

衣装協力：writtenafterwards

映像撮影：前 伊知郎

④地域交流プログラム

〈パフォーマンス映像「みぎわ」上映〉

日時：11月14日(土)、15日(日) 各日14:00-17:00

場所：金石スタジオ

参加者数：14日-53名、15日-59名 計112名



金石海岸でのロケハン



パフォーマンス映像「みぎわ」上映

Co.山田うん

Co. Un YAMADA

2002年に設立の山田うん率いるダンスカンパニー。さまざまなバックグラウンドを持つダンサー、俳優、モデル、振付家、演出家、指導者、教員ら十数名が所属している。主な活動として、継続的な新作発表と国内外でのレパトリーツアー、オペラやミュージカルのパフォーマンス、伝統芸能、学術、ファッションなど異分野とのコラボレーションやイベントプロデュースなど多数行っている。また、全国各地の劇場で子どもたちへのダンスプログラムや保育園、幼稚園、小中学校、福祉施設でのダンスワークショップなど、幼児から高齢者まで心身の育成に力を入れている。

AIR 5

村上 慧

●滞在期間

2020年10月26日～2021年3月27日



村上慧は2020年10月から約5ヶ月間、金石レジデンスに滞在した。村上の長期的なプロジェクト「移住を生活する」は、村上が発泡スチロールを素材にした自作の家を担いで歩き、他者の敷地を借りて寝泊まりしながら移住を繰り返す。その私的な日々の活動を通して公の状況をつくる本プロジェクトは、個人の生活がどのように社会に影響を与えるのかという考察でもある。このように「住む」ということが活動の中心にある村上にとって、知らない地域に居住するという自体がプロジェクトの一環なのだ。

コロナ禍の滞在では、積極的に地域の人たちと交わるようなことはなかったが、彼は日常を淡々と金石で過ごしていた。その中で見えてきた金石の風景や余所者だからこそ気が付くまちなかの様子などを記録し続けた。

金石での滞りで村上は二つのプロジェクトを実現した。一つは、展覧会の出品作品の一部でもある《広告看板の部屋》で、バスターミナル近くの「美容・理容サロン はいからさん」を取り上げたものだ。「移住を生活する」を進める中で、生活費について尋ねられることが多く、そこから生まれたこの作品は、消費と収入を一体化し、村上が気になったお店やお世話になったお店の広告看板を作る代わりに、そのお店で売っている物やサービスを村上が提供してもらうという仕組みだ。貨幣で物やサービスを受け取るのではなく、自身の作品を通してそれらを受給することで生活を成り立たせようという考えだ。

もう一つが、金石スタジオでアーティストのカン・タムラと内田涼と共に1日限りの映画館を開設した。3人が気になった金石の風景を8ミリフィルムを用いてワンショットで撮影し、『2.5 MINUTES IN KANAIWA』というタイトルをつけて、1日に6回、映写機で上映した。また屋台で販売している駄菓子、レモン、陶器、ZINEなどのCMも作成し、本編の前に放送していた。ノスタルジックな映画館の演出に加え、村上とアーティスト仲間たちで制作した風力発電で光るLEDランプ付きの屋台では、彼らの思い思いの商品が販売された。1日限りの映画館だったが、地域の人々が大勢来館し、手作りの映画館を満喫し、屋台での買い物を楽しむ人で賑わった。その後、この屋台は「週末屋台」(p.64-)という地域の人たちの自発的な活動で使われている。アーティストが残したものが、地域の人々が集う場所となり、人々のつながりをより強いものとしてくれている。[NY]

●実施データ

①トーク

〈アーティスト・トーク：村上 慧〉

日時：12月20日（日）14:00-15:30

場所：金石スタジオ

参加者数：23名

②地域交流プログラム

〈金石ミニシネマプロジェクト～実験版～〉

日時：3月27日（土）13:00-16:00

場所：金石スタジオ

参加者数：62名



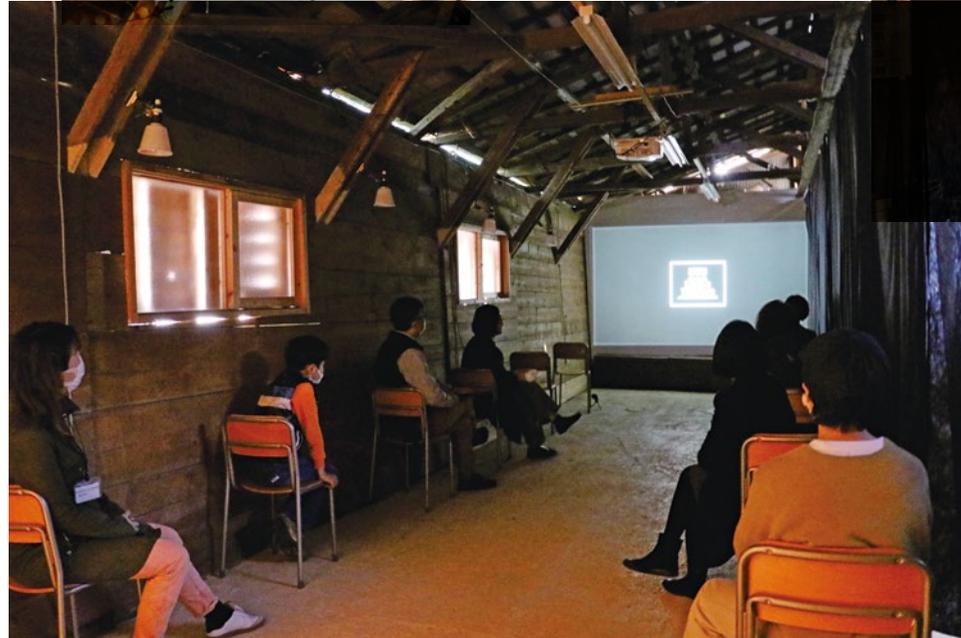
こたつに入っているアーティスト・トーク



撮影するカン・タムラと村上慧



金沢21世紀美術館に設置された《広告看板の部屋》



金石ミニシネマプロジェクト～実験版～の様子



映写機で投影するカン・タムラ

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

はじめはふらつと散髪に来てくれました。その後《広告看板の部屋》の話聞いて、いい機会だと思っ参加したんだ。広告費の変わりにしたトリートメントは本人も気に入ってくれたんじゃないかな。広告看板を見た人から反響があったよ。自分の写真が大きく使われてびっぴりしたよ（笑）。この看板を見てお店を知った人も、町の人も、もっと気軽に遊びに来て欲しい。
 「美容室「はいからさん」店主・吉野善正」（2021年2月号）

村上 慧

MURAKAMI Satoshi

1988年東京都生まれ。2011年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2014年より自作した発泡スチロール製の家に住む「移住を生活する」プロジェクトを始める。私（わたくし）と公（おおよけ）の関係に着目し、個人の生活がどのように社会に影響を与えるかを考察している。「村上慧 移住を生活する」金沢21世紀美術館（2020-21年、石川）をはじめ近年は国内外の美術館や芸術祭への出品多数。著書に『家をせおって歩く』（福音館書店）及び『家をせおって歩いた』（タ書房）があるほか、ミシマ社と福音館書店のウェブマガジに連載を持つ。

PP まち部

町の資源を掘り起こし、課題やヴィジョンを地域の人と考えていくために「まち部」を立ち上げました。「はま部」(p.20-) 同様に、プログラムを開催する際に「まち部」とタイトルをつけ、その都度参加者を募集する形を取りました。金石・大野エリアでは既にまちの歴史や風俗を大切に学び合いや紹介の機会も作られていたことから、「まち部」ではあえて他の地域で様々な取り組みを行う方をお招きし、「よその」の視点を共有する時間としました。

「01 トークセッション〈岡 昇平〉」では金石と同じく中心市街地から車で30分ほどの距離、門前町として栄えた香川県高松市の郊外・仏生山で「仏生山まちぐるみ旅館」に10年取り組んでいる岡さんのお話を聞きました。「02 ワークショップ〈海とまちと刺繍〉」では刺繍作家の高さんをお招きし、散歩をしてみつけた風景やものを刺繍することで、普段とは違う視点でまちを見ることを試みました。「03 トークセッション〈新居幸治〉」では「衣」「食」のつながりを軸に素材を探求するデザイナー新居さんから、素材としての「蜜蝋」そしてそれを掘り下げた「養蜂」についてリサーチや今後のアイデアを伺いました。

まちづくりは誰にでも関わるものであり、日々の生活から一歩踏み出すきっかけとなることを目指していました。まちづくりというとハードルが高く感じられることもありますが、「まち部」では手しごとやものづくりの視点で考えることから始めました。

また、地域資源のリサーチや分析は東京理科大学伊藤研究室との取り組み (p.70-) へと展開していきました。



●トークセッション〈岡 昇平〉
日時：2019年7月25日(土) 19:30-21:00
場所：金石スタジオ
講師：岡 昇平(仏生山温泉番台/建築家)
参加者数：28名

岡昇平さんと熱心に話を聞く参加者たち



●ワークショップ〈海とまちと刺繍〉
日時：2019年10月26日(土) 10:00-16:00
場所：金石スタジオ、金石海岸
講師：高 知子(atelier taffeta主宰)
参加者数：20名

風景を刺繍する様子



●トークセッション〈新居幸治〉
日時：2019年11月16日(土) 16:30-18:00
場所：金石スタジオ
講師：新居幸治 (Eatable of Many Orders主宰)
参加者数：20名

ミツバチカルチャーと六角形について話す新居幸治さん

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

9月号)
「金沢21世紀美術館 キュレター・中田耕市」(2019年)
た言葉でした。
り、そこから得た実感がこもった。
ちの活性化」の標語とは真逆ですが、彼の歩みそのものでもあり、そこから得た実感がこもった言葉でした。
あるものが、自然に観光資源にもなっていくことも「大切にしたい」と。よく言われる「まちの活性化」の標語とは真逆ですが、彼の歩みそのものでもあり、そこから得た実感がこもった言葉でした。
ずもりさがるから)、「観光地にしない」(日々の暮らしの中に
ない」(自由につながり、風通しのよい状態を保つ)、「もりにあ
げない」(もりにあがった後は必
ずもりさがるから)、「観光地に
しない」(日々の暮らしの中に
あるものが、自然に観光資源に
もなっていく)ことも「大切に
したい」と。よく言われる「ま
ちの活性化」の標語とは真逆で
すが、彼の歩みそのものでもあ
り、そこから得た実感がこもっ
た言葉でした。

地元の企業との連携事業

スターバックスコーヒー金沢百番街Rinto店が「自治区 金石大野芸術計画」と連携し、店舗1周年を記念した作品を制作するプロジェクトを行いました。不要になった九谷焼を地域からもらい受け、海岸で集めた漂着物と組み合わせた作品を金石スタジオで制作しました。新作「金沢のケツァール」は店舗に飾られました。



●スターバックスコーヒー金沢百番街Rinto店
× 淀川テクニック
アートプロジェクト@金石
公開制作：2021年6月25日（金）～7月17日（土）
作品お披露目会：2021年7月18日（日）
場所：金石スタジオ
料金：無料（見学自由）
主催：スターバックスコーヒージャパン株式会社

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

モチーフとなったケツァールは、コーヒー豆の産地であるグアテマラの国鳥でもあり、和名をカザリキヌバネドリと呼ばれ、火の鳥のモデルにもなったと言われるような美しい鳥です。メインとなる素材には金沢で集めた「欠けてしまったものや、使われなくなった九谷焼」と金石スタジオから歩いてすぐの金石海岸で拾い集めた「漂流ゴミ」を使用しました。金沢市内のスターバックスのパートナーさんや地元の方々と一緒にビーチクリーンをしたり、声を掛け合って使われなくなった九谷焼を集めてもらったりすることで、素材だけでなく、金沢の人々のつながりで生まれたケツァールだと実感しています。

〔淀川テクニック〕（2021年8月号）

金石スタジオ通信

金石スタジオの活動を地域の方々に知っていただくために、2019年8月より毎月または隔月で『金石スタジオ通信』を発行し、公民館や町会のご協力や、回覧板を通じて金石地域に住む方々にお届けしていました（44町会、約2500世帯）。2022年の8月まで、合計35号が発行されました。美術館スタッフによるイベントのお知らせやリポートのほか、アーティストや地域の方による寄稿もあり、「自治区 金石大野芸術計画」のことを地域の方に知ってもらうメディアとなっていました。最初の号では地域コーディネーターの鈴木葉菜さんが描いたイラストが添えられ、その後もマンガやすごろくなど気軽に読めるような工夫がされていました。すべての号がアーカイブとして美術館webサイトに公開されています。



金石スタジオ通信 2019年8月号



SNSでの発信

金石スタジオ通信やチラシの配布、美術館webページでの情報掲載以外にも「自治区 金石大野芸術計画」に関心を持つ人を広げようとSNSの運用を行いました。2020年6月から2022年9月までInstagramを使い、コーディネーターが金石の町の様子やプログラムの告知などを即時に発信しました。

かないわ楽座

「かないわ楽座」は、人々が集い話すためにアーティストやクリエイターが場を開くプロジェクトです。

会場となったのは、かつて賑わいを見せていた金石商店街。これまでアーティストが滞在していた金石スタジオから街の中心地へと移動し、空き店舗や緑地公園、築130年を越える町屋などで実施しました。

これは商店街の活性化や観光客の誘致を目的とするものではありません。自由な発想をするアーティストとともに、地域の方が自分たちの暮らす町のこれまでとこれからについて考えてみる試みでした。「防災」「環境」「手仕事」「交換」「海の豊かさ・陸の豊かさ」をキーワードにさまざまな展示やプログラムを1ヶ月に渡り展開し、手芸やものづくりへの参加、ものを購入するときに生まれる会話といった気軽なアクションがきっかけとなっていました。

2021年に行われたこのプロジェクトは、コロナ禍でオンライン上での取り組みが増える中で、モノやコトが交差し、直接人と人とがやりとりできる場となり、これまでの「自治区 金石大野芸術計画」のプログラムと比べても来場者の層が広がったほか、アーティストとの出会いをきっかけに地域の方々が刺激を受ける機会となりました。宮田明日鹿が立ち上げた、手芸をしながら人と語り合う「金石手芸部」は、「かないわ楽座」の終了後も地域の方々に活動が引き継がれ、人々が集まる場が継続しています。



イラスト：田淵千沙子

●期間

2021年7月3日(土)～7月31日(土)

7月31日は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止



かないわ
楽座
KANAIWA RAKUZA

ロゴデザイン：田淵寛之 (KYUKEISHA)

金石町商店街にある3つの空き店舗と営業中の1店舗、小さな緑地公園、築130年以上の1軒の町屋の合計6ヶ所が会場となりました。

●旧榎田堂
榎田堂は老舗の和菓子屋で、2018年に金石中学校近くに移転した。旧店舗は空き家となり、照明や壁紙、店内のディスプレイなど、かつての和菓子店の面影がほとんど残っていない。

●旧田村化粧品店
2017年頃までは営業していたが、高齢を理由に55年間の営業に幕を下ろしていた。棚や備品はそのまま残されていた。

●旧こうの
明治40年終わり、文房具や本、教科書を販売する「こうの」を開業。現在の大家さんの祖母がはじめ、家族で引継ぎながら約110年営業した。

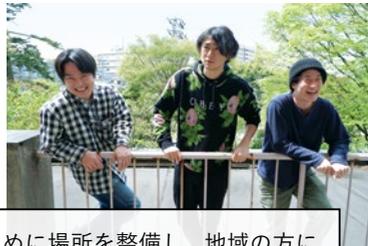
●辻洋傘店
明治時代に開業、当時は北前船で運ばれてきた番傘を販売していた。現在も営業している現役の店舗。

●宮腰緑地
「宮腰」は金石の旧地名であり、その名を残している。門が構えられ中には東屋や石庭もある日本風の公園。

●宮野邸
金石エリアの代表的な町屋の形式を残す、築130年を越える町屋。玄関の土間や囲炉裏、拭き漆に朱壁のお座敷と見所も多い。

かないわ楽座を支えた地域コーディネーター

金沢美術工芸大学出身の3名のアーティストが2021年春から地域コーディネーターに加わりました。彼らは自身もアーティストとして「かないわ楽座」での展示やワークショップを行う準備を進めながら、県外から金石を訪れるアーティストが金石の商店街で活動するために場所を整備し、地域の方に



左から、渡辺秀亮、菊谷達史、中島大河

取り組みを知ってもらうためのアイデアを考えていきました。「かないわ楽座」会期中は3人のうち誰かは旧樫田堂に在廊し、アーティストのフォローや地域の方や来場者との交流に奔走しました。

「かないわ楽座」が地域に溶け込むよう、彼らが考えたものが「のれん」と「うちわ」、「壁新聞」です。商店街に点在する「かないわ楽座」の会場に目印となるようにシルクスクリンでロゴを刷った手作りの「のれん」を掛けると、まちなみに溶けこみながらも、空間に一体感が生まれます。開催時期が盛夏ということもあり広報ツールも兼ねて作られた「うちわ」は和紙と竹で作られ見た目にも涼しく、ロゴやプロジェクト名、会期が刷られました。また、チラシに載っていない直近のプログラムや、どのようなことが今起きているかを地域の人たちに知ってもらうために旧樫田堂に掲出された手書きの壁新聞は親しみやすい雰囲気を作りました。



ロゴマークの入ったうちわ



『かないわ楽座しんぶん』
イラスト：中島大河



ロゴマークの入ったのれん

金石町商店街の風景



旧榎田堂

金石通町4-20

和菓子屋だった旧榎田堂では、地域コーディネーターを務めアーティストでもある渡辺秀亮、菊谷達史、中島大河の3人がかつての厨房や店舗部分など空間を分け合いワークショップや作品の公開制作、展示を行いました。地域の人たちや来場者との対話をつくり上げていくという「かないわ楽座」全体のテーマから、来場者自らが手を動かすワークショップや、写生会の開催を組み込みました。旧榎田堂は、「かないわ楽座」のインフォメーションセンターも兼ねていて、地域の方の声を集めたり (p.63)、座談会を行うなど交流スペースとしても機能しました。



旧榎田堂外観

渡辺秀亮 (石彫家)

和菓子屋だった会場にちなみ、おまんじゅうに見立てた石を磨いてもらうワークショップ「石のおまんじゅうを磨こう」と作品展示を企画しました。石を磨くという一見面白いのかわからない、かつ面倒くさそうなのが、実際にやってみるとまるで想像しているかのような心地よさと、石が光ってきたときの感動を味わえ、没頭する参加者が続出しました。会場には石彫作品も展示しましたが、「による旅 in 金石」という石の作品「による」を連れて世界中を旅する写真作品を金石で



ワークショップ「石のおまんじゅうを磨こう」

制作しました。金石の日常風景に突然「による」が現れたら皆さんがどんな反応をするかなと楽しみに写真を展示したところ、「この場所はどこかな?」や「今もこの場所にあるんですか?」などさまざまな会話が弾みました。その他、渡辺家ということで、家族の作品も展示することができ、ワークショップ参加者など来場者の方々と楽しく触れ合えた、この「かないわ楽座」の1ヶ月間は、本当に夢のような時間でした。会場整備などの期間も含め、金石スタジオや商店街で金石の皆さんと出会い、関わる事ができたことが、自分にとって何よりの宝物になりました。

(渡辺秀亮)

菊谷達史 (画家)



滞在制作風景

●かないわ屋外写生会
日時：2021年7月22日(木・祝)、
23日(金・祝) 9:00-17:00
場所：金石海岸



自宅から車で片道30分のところに位置するこの金石で、私は言うなれば「AIR気分」で活動することにしました。行った活動は大きく二つです。一つは新作アニメーションの公開制作。これは、旧榎田堂の調理場だった壁面に直接ドローイングを施し、それを撮影しては消し、また描くを繰り返すことで、壁画アニメーションが出来上がっていく様子を公開するもの。二つ目は金石海岸からの徒歩数分のところに位置する金石海岸は、かつては海水浴場もあった地元住民の憩いのビーチです。7月22日(海の日)と7月23日(スポー

ツの日)の2日間、参加者を募り屋外写生会を企画しました。私は公開制作と屋外写生(制作環境とロケーション)という二つの場所に依拠したプログラムを通し、「ある土地に一時的に滞在し行う芸術実践とは何か?」を考えたかったのです。AIRとは、アーティストが自身の拠点ではない土地に滞在し、一定期間そこで活動することを意味します。芸術の基本的な条件である「移動と集合」について改めて問われているこの時代に、「かないわ楽座」という地域アートプログラムに参加できたことは、僕にとって大きな意味があるものでした。

(菊谷達史)

中島大河 (珠洲焼作家)

焼き物をするには窯が必要なのですが、学芸員の中田さんに「金石スタジオに窯作ったらいやん。」と言われ、それならばと考えたのが、成形から施釉、焼成までのほとんどを工程を金石で体験できる「手びねりワークショップ」でした。薪や炭による焼成は管理が大変難しいのですが、耐火煉瓦と火を出してよい場所さえあれば、ある意味ではどこでも焼くことができます。内容としては、窯の仮設性や温度管理、焼成時間の問題から通常の焼き物より低い温度で焼ける「楽焼」をすることに決めました。一般的な作陶体験に



手びねりワークショップ

●窯焚き
日時：2021年7月17日(土)、31日(土) 13:00-
場所：金石スタジオ



なると、ロクロや手びねりで成形した後の工程は職人が行っていますが、今回は成形した後にも、施釉体験、焼成見学に多くの方に再び来ていただくことができました。特に金石の方々は近所というところもあって仕事や学校の帰り、休中など、ふらっと顔を出していたので、より焼き物への理解や作品への愛着が深まったように見えました。焼成に関しても、窯内部の温度変化によって「窯変」が見られたりと、火を使っても、焼く醍醐味を感じる場面もありました。ひと月にわたるプログラムならではの貴重な体験をさせていただき、有り難く思います。

(中島大河)

旧田村化粧品店

金石下本町2-18

牛嶋家

ウシジマヒトシ
オーギカナエ
ウシジマキナミ
ウシジマタイヨウ

旧田村化粧品店外観、
牛嶋均
《ころがるさきの玉 ころがる玉のさき》
(2008)



旧田村化粧品店の店主・田村くに子さんは、店を閉めてから何年も経った今も店舗に接続する母屋で暮らしています。「かないわ楽座」の当時、店の中は商品の残りや家財道具で埋め尽くされていました。金沢21世紀美術館の収蔵作家のウシジマヒトシと妻で作家のオーギカナエ、そして二人の子どもたちで構成される「牛嶋家」の中で、母・オーギカナエは、店主の田村さんと最も長い時間を一緒に過ごしました。昔の思い出を聞きながら店の中を一緒に整理することから始め、楽座では「防災」をテーマにオーギのオリジナルキャラクター「スマイル」をモチーフにしたワークショップを開催。長女・キナミは冊子を作成、長男・タイヨウは映像作品を制作上映しました。父・ウシジマヒトシは北前船に関心を寄せ地域の方から話を聞く会を開いたほか、金沢21世紀美術館の収蔵作品《ころがるさきの玉 ころがる玉のさき》を海に浮かべるプロジェクトを街の人たちと実行。直径約2mの地球儀型の鉄枠でできた「玉」をどのように人を巻き込み楽しく使うかというプロセスが重要な作品で、今回は金石で海と造船に関わる加賀建設の協力のもと必要な浮力を計算し玉の中にプイやビーチボールなどを詰め込み、海へと浮かべました。「海と山の交換会」では久留米の本家・牛嶋家のお気に入りのお店を紹介し、商品だけでなく豊かなエピソードを交換しました。

田村さんは来場者に積極的に声をかけ、滞在していたアーティストたちも「田村のお母さん」と慕っていました。会期終了後もサロンのような場所として開放する話も生まれ、「金石手芸部」に引き継がれ、今も地域の人がつながる場として楽しい声が響いています。

2020年に金沢21世紀美術館の黒澤さんから金沢市金石でのレジデンスに参加しないかという打診があった。黒澤さんからは作品を制作して残すという事よりも、その場作家が実際に暮らしている、という事自体が街に変化をもたらすのではないかと、そういう事をやってみないかという話になった。

最初、この企画はウシジマヒトシとオーギカナエに打診があり、レジデンスの期間が3ヶ月から1年間という漠然としたものだったが、久留米の拠点を閉めてずっと金石に2人で住み続けるのは、現実的には不可能だった。ちょうどその頃、2人の子どもの友達キナミとタイヨウ、は各々通っていた美術大学を一旦中断して自宅に帰って来ていた。奇しくも牛嶋家には、アーティストである自分とオーギ、そして写真と平面デザインを専攻していたキナミと映像学科で撮影編集を専攻していたタイヨウの4人が揃っており、この家族体制をそのままレジデンスに持ち込んだらどうかとアイディアを出したのだった。当初は4人が交互に金石に滞在して、各々がそこで出来ること、やりたいことを考えて実行する。そして時間をかけて牛嶋家の作品としてカタチにしていこうといった考えであったと思う。しかしコロナ禍で移動や活動の自由が制限されたり予算の都合もあったり

と、結果的には1ヶ月間の滞在に留まった。その間、オーギは田村さんの元化粧品屋の店舗を一緒に片付けて、自身の作品「スマイル」でワークショップと展示を行い、キナミは牛嶋家全体のリーフレットのデザインと製作、およびワークショップを担当。タイヨウは金石と地元久留米で撮影したロードムービー的な映像2本を制作展示した。

金石には、4人が部分的に重複しつつも、交互に入れ替わりながらの滞在となった。これはコレクティブなのだろうか？ 4人家族という事でもあり、4人で一つの目的を達成するというより、個別に得意なことを各々が先行し、それをまた各々がサポートするという共存関係だ。これは新しいのか。それとも特に目新しくもなく普通の事なのか。(そもそも家族だし！)

家族として共有している時間と場所が私たちが普段住んで活動している九州から、北陸の海辺の街にそのまま移動してきただけ？ しかし、この移動しただけが金石の人たちの間では、良い化学反応を起こした気がする。これはアートだと問われれば、これはアートですと答える。他に例えようがない。こうして生きていくという姿勢を常に示し続ける事が、とりあえず、牛嶋家であることは間違いないのだから。

(ウシジマヒトシ)

オーギカナエ (左) と田村くに子さん (中央)



映像作品 (左奥)、リーフレット (左手前)、カバンに付けた「スマイル」グッズ



《スマイルポスト》
オーギカナエ

- 〈父：ウシジマヒトシ〉
●展示「玉がやって来た！」 お話会「玉からの北前船」
日時：2021年7月18日 (日)
場所：旧田村化粧品店
- プロジェクト「玉、海に帰る」
日時：2021年7月31日 (土)
場所：宮腰緑地や金石海岸など
- 〈母：オーギカナエ〉
●展示「スマイルポスト」
- ワークショップ「スマイルのお守りキーケースづくり」
- 〈長女：ウシジマキナミ〉
●冊子制作・配布「牛嶋家リーフレット作戦」
- 〈長男：ウシジマタイヨウ〉
●映像上映《山と海》
- 〈牛嶋家〉
●販売「海と山の交換会」、
旧田村化粧品店ガレージセール、グッズ販売



「玉、海に帰る」加賀建設の方々とともに

旧こうの

金石通町2-12

宮田明日鹿／ 金石手芸部



机を囲むと話したり教えたり会話が生まれる



参加者と話しながら編み物をする宮田明日鹿

宮田明日鹿は、家庭用編み機を使って作品づくりをするアーティストで、2017年から「港まち手芸部」(名古屋市)を自身のプロジェクトとして企画運営を行っています。その経験から、「かないわ楽座」では元文房具店を使って「金石手芸部」を発足しました。文房具店の店主やその家族と共に、店舗の片付けや備品整理をするところから手伝い、市内の手芸用品店から毛糸を寄付してもらったりするうちに、ご近所の人から古くなった道具をもらうなどして素材が集まっていきました。手芸初心者から上級者まで、年齢、性別も問いません。誰でもふらっと立ち寄ったら編み物や縫い物など、手を動かしながら世間話を楽しむ空間が出来上がりました。宮田は「自分が先生となるのではなく、あくまでも部長であること、上下の関係はつくりたくない。そこに集まった人同士が教え合ったり、話し合ったりして楽しい時間と場をつくっていくことがこのプロジェクトの肝であり、手芸という生活に身近な行為を通して、人が交流する場づくりだ」と言います。

会期中の来場者は、常連さんから噂を聞いて初めて訪れる人までさまざま。世代もばらばらで、子どもから高齢者まで幅広い層の人たちがこれを作ってみよう、あれを作ってみよう、それはどうやって作るの？と技術的なことから、近所のお風呂屋さんの情報や野菜の育て方、美味しいお店の情報、子どもの学校の話など話題も豊富です。職場や身近なコミュニティとは異なる人たちが集まる手芸部は、通ってくる人たちにとっては新しい自分の居場所となっているようでした。

「かないわ楽座」の閉幕が近づいてきた頃、手芸部に通っていたコアメンバーたちから今後も続けたいという申し出がありました。宮田にとっては自分が普段来られない場所での手芸部の存続は初めての経験でしたが、宮田が手芸部の活動で大事にしていることを「金石手芸部」のメンバーとじっくり話し合い共有し、2022年10月から正式に町の部活として継続させることになりました。手芸部の部室となる場所は元文房具店から「牛嶋家」の会場となっていた旧田村化粧品店へと移動し、月1～2回のペースで「金石手芸部」の活動は継続しています。



手芸部の作品は旧こうのに展示された



手芸が得意な人も初心者も、誰でも参加できる

これまでのレジデンス、自身の仕事作りなどの経験を通して路面店という条件は重要で、準備段階から町の方が通りがかったら声をかけてくれました。準備段階から時間を積み重ねていったことで、オープン後気になってくれた町の方が少しづつ集まってくれました。私自身の役割は、手芸部を通して手芸のこと、生活のこと、現代美術と一緒に見に行ったり、考えたりすることだと思っています。作家自身が教えるとかではなく、あくまでも一緒に楽しむことが大切だと考えています。

名古屋での「港まち手芸部」は長期のプロジェクトで、それを短期間で1から行うのは条件も違うので最初は丁寧なコミュニティを作れないのではないか、と

びくびくしていました。でも、自治区のプロジェクトは徐々に地域の人に浸透していて、いろんな世代の方が集まって場所を作ることが出来てよかったです。「金石手芸部」は予約不要で待つスタイルで、やってきた人とその場での雰囲気作りや様子を見てどういったふるまいをすればいいのか、回を重ねると学びが多かったです。短期でもできるんだと、自分の考えが更新された機会でもありました。

手芸部を通して「一家の中のことを外に出してみる」と定義して女性が置かれてきた、置かれている状況、手芸ってなんだろうということは今後も考えて活動を続けられると、確信できた時間になりました。

(宮田明日鹿)

●「YARN 人生を彩る糸」上映会
日時：2021年7月24日(土)
場所：金石町公民館講堂
提供・配給：ミッドシップ+kinologue

辻洋傘店

金石通町1-9

辻家の森

角島 泉 (花のアトリエ こすもす)

塩谷美馨 (甘味こしらえ しおや)



辻洋傘店は明治時代に開業し、当時は北前船で運ばれてきた番傘を販売していた歴史のある、現役の店舗です。花のアトリエ こすもす主宰の角島泉は独学で植物のことを学び、花屋とギャラリーを営みながら、植物と人の暮らしの共生を提案し続けています。作品と呼べる形を

生み出すアートとは違うけれど、手を使って何かを生み出す、という意味では、十分にアートな行為を体現する植物屋です。夏の間は花が弱い例年長期にわたる夏休みを取って店を閉めるため、その時期に金石に出張店舗を展開するのはどうかと美術館が持ちかけたのです。

角島は面白がって現地調査をして、間取りや雰囲気から、商店街にある傘屋の一角を間借りして、夏の間、金石にアトリエの一部を移して店舗を持ちました。傘もそのまま引き受けて販売し、同じ空間に、友人でもある塩谷美馨が営む「甘味こしらえ しおや」を招きました。「しおや」は夏かき氷を中心に人気の高い店。コロナ禍でなければ、隣の公園にかき氷を待つ近所の子どもの歓声が聞こえるはずでしたが、叶わなかったのは唯一の心残りです。しかし、代わりに、花と傘のある空間で、ジャムやプリンなど季節の甘味を提供して、暑い中を歩いてきた親子連れが優しい味と冷やかな食感を楽しんでいました。

植物で鬱蒼とした店内は、どこかレトロで異質な雰囲気があり、訪れた人々は、知らない名前の植物の特性を聞いたり、緑色のボトルに詰まったハーブの虫除けを試したり、そして帰りにはプリンと植物を手に店を出る、といった具合。商店街とは、必要なものだけを買求めるために立ち寄るのでなく、物や人を媒介にして、日々の暮らしの話題を分かち合う、マイクロ・コミュニティの中核の場でもあります。暮らしの根を持たない気軽さと共に現れた植物屋と甘味処は、地域の日常に一瞬違う風が吹き込み、地縁とは異なる関係を提案したことになったのです。

宮腰緑地

金石通町1

かえっこバザール in 金石



「かないわ楽座」開催期間中は毎週末、商店街の通りにある宮腰緑地で「かえっこバザール in 金石」が開催されました。「かえっこバザール」は、アーティスト藤浩志が始めた要らなくなったものを物々交換するプロジェクトです。重要なのは、子どもたち主体で運営すること。金沢でも複数の団体が「かえっこバザール」を開催していますが、「かないわ楽座」では「NPOかえっこまるびい」に金石での開催を依頼しました。

地域の子どもたちがお店の準備をするために集まり、みんなで話し合いながら役割分担を決め、商品を陳列し、来客の対応をします。「かえっこ」の噂を聞きつけて大人と一緒に要らないおもちゃを持って会場に来る子どもたちも徐々に増え、炎天下にもかかわらず週末の宮腰緑地は賑わいをみせました。「かえっこ」は週末ごとに開催されていたため、次第に運営側の子どもが増えていき、子どもたちが自主的に準備や片付け、初めて会った来場者への挨拶、他者とのコミュニケーションといったことが自然にできるようになっていました。

さらに、お店を運営する上で決めなければならないさまざまなことを子ども同士で話し合いながら進めている様子は、まるで小さな社会さながらであり、まさにこの点こそが「かえっこ」の魅力であり醍醐味なのです。

こうして毎週末、宮腰緑地には子どもたちによる小さな社会活動が展開されていました。公園の前に子ども用の自転車がびっしりと駐輪された様子はなんだか懐かしい風景でした。最近はこの風景をあまり見なくなったからなのか、公園前に自転車が並ぶ光景が地域にとって、とても貴重なものに見えました。



●かえっこバザール in 金石
日時：会期中の土・日 13:00-15:30
協力：NPOかえっこまるびい

宮野邸

金石下本町2-8

海が繋ぐ

器のしつらい
矢部慎太郎 (サロン・ド慎太郎)

生花
角島 泉 (花のアトリエ こすもす)



海を玄関口に外からの文化を取り入れてきた歴史を有している金石。築130年以上になる金石の町家・宮野邸では、海がつなぐ大陸に想いを馳せ「海で繋がる文化」をテーマに、李朝家具、白磁壺、ソバン (御膳) など、生活を豊かにする器と花で空間を演出しました。

期間：7月28日 (水) ~ 30日 (金)

商店街写真館



白黒写真で残された昔の金石の生活風景を「商店街写真館」として商店街の店頭やウィンドウに掲示しました。海岸での海開きの神事や鉄道金石線の往来、祭りや体育大会、金石ならではの家庭料理など、写真をたどる、まち歩きのひとつが生まれました。

商店街に写真が掲示されている様子

展示協力 (五十音順)：安野酒店、うねだや、沖書店、旧榎田堂、金石ハウス、タニヤン、旧田村化粧品店、鶴山陶器店、なっちゃん、はいからさん、ひまわり、船木屋、宮野邸、よねだ生花店 (場所の一覧を旧榎田堂「かないわ楽座」インフォメーションにて掲示)
写真協力：金石町公民館、本龍寺、かならボ、うねだや
協力：金石町商店協同組合

「声を聞く」

「かないわ楽座」の来場者の言葉や、来場者とアーティスト間のエピソードをインターンが集めました。会期中に集めた言葉は旧榎田堂内の壁面へ掲示を行ったほか、来場者が直接「声」を書き掲示することができるスポットを設置しました。その中から、一部を紹介します。



旧榎田堂内での座談会の様子

『ここ来たら、今みたいに、町の方とお話できていいかなって。』

『金石に映画館がふたつもあったんよ。』

『金石大野あたりにはずっと来たかったけど、なかなか来れてなくて…。しおやさんのお菓子がきっかけで来ました。』

『にわ部も前から行ってみたいと思っていたけどなかなか…。今回はまちの中の活動だから思いきって来やすく。』

『ワークショップで出会った方に、まち音ポストのこと、教えてもらったんです』

『浜での花火、すごい人気だったんよ。花火ある時、いっちゃんよかった。』

『実際にこの場所に来ないと、分からないことがあるものですね。』

『何十年ぶりに金石に来ました。』

『茶碗屋、お酒屋さん、金物屋さんやろ、氷水とか鯛焼きしとる店とか、いろいろあったね。』

『10年くらい前までは、お年寄りが手押し車押して歩いてたけど、その姿も見なくなっちゃったからね。』

『金石は、前はよく来ていたけど、最近あまり来れてなかった。昔は地域の内輪で閉じたイメージだったけど、新しい場ができて、すごく開けた感じがする。』

『昔は1日、2日、3日って、必ず決まっとったんよ。それがね、だんだんだんだん、普通の日だったら、神輿担ぐ人がいなくなっちゃって。子どもいなくなっちゃって。』

PP 展開

週末コンテナ／週末コタツ／週末屋台

AIR(アーティスト・イン・レジデンス)やPP(パブリック・プログラム)の「にわ部」「はま部」「まち部」の活動から、金石スタジオを中心とした地域の方の主体的な活動も生まれました。

2019年の秋には田口行弘さんの滞在をきっかけに「週末コンテナ」が始まりました。これは田口さんの作品をドイツから船便で輸送するためのコンテナが、作品が海岸にある期間中は空になるため、後に地域コーディネーターとなる、当時のご近所の河合紗那さんがコンテナをお店に見立て、駄菓子屋や体験プログラムを行いました。

その後、コンテナが作品を載せて金石を旅立つと交流の場所は金石スタジオへ移ります。2020年の年明けから「週末コタツ」と題し、こたつを囲んでボードゲームをしたりお茶を飲んだりと緩やかな空間ができました。この取り組みは「おでかけ週末コタツ」としてまちなかにも広がっていきました。

週末〇〇シリーズの第三弾は2020年夏から始まった「週末屋台」。屋台の店主になって自分のやりたいことにチャレンジする場となりました。机やテントなどの備品を使用できることも挑戦を後押しする一つでした。地域コーディネーターの堀江紀子さんはまずは自分からと瀬戸内の豊島の農家さんから送ってもらった「レモン屋」をオープン。これらの取り組みは地域の中での人のつながりを生み、美術館の事業が終了した後も金石の町で地域の方が活動を行う機運となりました。

週末コンテナの様子



●交流プログラム
〈カワイの週末コンテナ〉
2019年10月5日(土)～27(日)の土日祝の10日間
各日10:00-15:00

●交流プログラム〈カワイの週末コタツ〉

①2020年1月18日(土)～2月23(日)の土日の12日間
各日10:00-15:00
②2021年12月11日(土)～2022年3月26日(土)の毎土曜日と
1月9日(日)、1月30日(日)、2月13日(日)13:00-17:00
※1月1日(土)は除く
場所：金石スタジオ、金石町内(本龍寺、町家ほか)



週末コタツの様子



週末屋台「レモン屋」

●交流プログラム〈週末屋台〉

2020年7月25日(土)～2021年3月27日(土)の22日間
2021年6月26日(土)～2022年2月26日(土)の22日間
2022年4月9日(土)～2022年9月24日(土)の23日間
<出店者>

あそべる移動水族館屋(移動おもしろ水族館 水越利勝)／縁日屋・かえっこバザール屋・工作屋・電車カフェ屋・バザー屋・野菜屋(かないわ みやのこし食堂)／おから味噌屋(堀けいこ)／大判焼き&フランクフルト屋(大河内直幸、大河内玲衣)／オシャレ屋・Xmasオーナメント屋(Limur 阿知波里紗)／おもしろデザイン屋(福浪漫 福田護)／金石手芸部屋(北村陽子)／がま口財布屋・キーホルダー屋・雑貨屋(Waf★saki 藤江晶子)／紙芝居屋とパピヤ屋(ドリサカ研究所 小坂保行)／珈琲屋・写真屋(吉野大地)／ZINE屋(村上慧、ドリサカ研究所 小坂保行)／出張写真屋(吉尾大輔)／タイルコースター&チョコレート屋(原田順子)／駄菓子屋(齊藤航、齊藤俊、齊藤紀子、齊藤誠)／ちやわん屋(中島大河)／ハロウィン屋(アトリエnoya 的場りか)／ボンボンリース屋(高橋洋子)／ものづくりしずく屋(橋本志津)／レモン屋(堀江紀子)

●金石スタジオまつり 2022秋

～週末屋台スペシャル～
2022年9月25日(日)10:00-16:00



〈金石スタジオまつり2022秋〉の様子

「週末屋台」フォトギャラリー

ここでは、さまざまな方の挑戦の場となった「週末屋台」の様子を「写真屋」としても活動していた吉野大地さんの記録写真で一部紹介します。

吉野大地さんのコメント

個人の活動として「金石写真部」と名付け、金石の写真を撮ってSNSにアップしています。初めて金石スタジオを訪れた時は怪しいなと思いつつ入りましたが、週末屋台などのプログラムを撮るようになってからは、もう少し自分に自信を持って写真で記録を残していこうと活動をしてきました。



「かえっこバザール屋」



「週末屋台」で賑わう金石スタジオ



「チョークアート屋」



「おもしろデザイン屋」



「ハロウィン屋」



「あそべる移動水族館屋」



「オジャレ屋」



「紙芝居屋」



「駄菓子屋」

当時の声：『金石スタジオ通信』より再編集

「週末屋台出店者・ドリサカ研究所K坂」(2020年11月号)

「どうかしているもの・人の調査研究を活動指針としている「ドリサカ研究所」という団体として出店しました。もう1人のメンバーであるMドリを共同店長として誘いました。沖縄県にあるMドリの実家から、家の周りに実っているパイナップルなどを開店時間ギリギリに到着するタイミングで送ってもらい現地直送感を確保して出品。紙芝居はオリジナル2作をお客さんが集まるタイミングで実演しました。シュール!という声やお口ポカーンな小さなお友だちのリアクションが楽しかったです。振り返ると、脈絡のない品目の混沌さ加減といい出店実態といい、自分たちが一番どうかしているのではないかとという結論に至り、赤面した次第です。金石スタジオの方達の寛容さに随分と助けられた気がします。また機会がありましたら、さらにどうかしていきます。」

金石で生まれたレシピ

北前船の寄港地として、また漁師町として栄えた金石には豊かな食文化が受け継がれてきました。例えば魚を醤油だけで煮たり、祭りの押しずしの仕切りに分厚いだし昆布を使ったり。昔は漁師さんからバケツで小さいカレイや小鯛をたくさん分けてもらうなど商品にならない魚をおいしく食べるための知恵も。その他にも“イワシのすり身の昆布巻き”や“生臭漬け”など金石独特の料理は数えきれません。

しかし、時代の変化もあり昔ながらの味を知る機会も減りました。そこで名乗りを挙げたのが金石の魅力を再発見し、内外に発信するまちづくり団体の「かならボ」。活動の一つである「かないわレシピ」は妙覚寺の寺尾賢右さんを中心に聞き取りや講演などを通して金石の食文化を残し伝え、発展させようという取り組みです。

かないわレシピ



『金石スタジオ通信』でも紹介された小イワシ料理「小イワシのおから汁」のレシピは、お腹の中から暖まる手間いらずの簡単スープです。小イワシと呼ぶものにはカタクチイワシとマイワシの小さいものがあります。写真はマイワシのものですがカタクチイワシでも同じように調理できます。

●レシピ

「小イワシのおから汁」

材料
小イワシ／おから／醤油

作り方

- ①小イワシは頭と内臓を取ってよく洗う。
- ②お湯を沸かし沸騰したら①を入れる。
- ③おからを入れ醤油で味をつける。

レシピ紹介者の
寺尾さんからのコメント

頭と内臓を取って、お湯を沸かせば即完成です。小イワシから出るうま味とおからの甘味のおかげで出汁を取る必要もありません。おから効果でお腹の中からぽかぽかと温まる冬にピッタリの料理です。



にわ部レシピ

新型コロナウイルス感染拡大防止のためポットラックパーティが中止となって以降も、自家製の美味しいものを持って金石スタジオに立ち寄ってくださる方がいらっしゃいました。他の方にもぜひ試していただきたいと、スタジオの壁に「にわ部レシピ」コーナーを作り、四季折々のレシピを紹介し、気に入ったレシピを自由に持ち帰れるようにしていました。畑で収穫したオカヒジキをバターと醤油でさっと炒めてご飯に乗せて食べる「オカヒジキ丼」、週末屋台 (p.64-) で販売していた瀬戸内レモンを使ったイタリア発祥のリキュール「レモンチェッロ」、庭で収穫したヨモギを使った「よもぎ餅」、石川県名産のサツマイモ・五郎島金時を使った「キントキゼリー」に「キントキご飯」などのレシピが紹介されました。

レシピ紹介者の 高階さんからのコメント

このお寿司はお祭りやお正月のおもてなしに作りま
す。彩り豊かで、お土産に
お渡しもできます。本来は
柿の葉で作りますが、笹の
葉でも。寿司桶に花びらの
ように並べると素敵です。

●レシピ

「笹の葉寿司」

材料 (6人分)
笹の葉：12枚／米：2合／寿司酢：適量／ごま：適量／
しその粉／適量／干し小海老：適量／干したら：適量

作り方

- ①お米を炊いて、寿司酢を混ぜて寿司飯を作ります。
- ②笹の葉を洗って拭き、寿司飯をおにぎりにして、手のひらに乗せた笹の葉の上で平らにして具材を載せて完成です。

東京理科大学 伊藤香織研究室との 共同研究

「自治区 金石大野芸術計画」の2021年度のテーマは「まちへ広がる」。金石の町をプロファイルするために都市デザインや都市解析を専門とする東京理科大学 伊藤研究室と共同研究を行いました。調査や聞き取りを実施し、金石の町の使い方の変容を「遊び場」の視点から読み解いていきました。調査報告会の座談会では地域の住民の方からも調査内容を裏付ける話や金石の将来について多くの意見が交わされました。2022年度には「東京理科大学 伊藤研究室ディスカッションシリーズ」と題し、先生方のミニレクチャーと地域の方との意見交換の場を作り、これまでの活動を地域の担い手へとつなげていく試みをしました。

2021年度

●まち部調査

あなたのまちの使い方 -小学生時代と今-
聞き取り調査ワークショップ
日時：2021年10月23日(土)～31日(日) 10:00-18:00
場所：金石スタジオ
対象：金石にお住まいの方、過去に在住歴のある方
料金：無料
参加者数：114名

●「あなたのまちの使い方」調査報告会

日時：2022年2月27日(日) 13:30-15:00
場所：金石スタジオ
料金：無料
参加者数：18名



聞き取り調査ワークショップの様子
(2021年10月23日)



調査報告会の様子(2022年2月27日)

2022年度

東京理科大学 伊藤研究室 ディスカッションシリーズ

●Vol.1 マチとハコとコトを考える スタジオが街にもたらずもの

第一部：
「金石大野芸術計画を振り返って」
(金沢21世紀美術館 中田耕市)
第二部：
「国内外の事例を通してマチとハコとコトを考える：
スタジオが街にもたらずもの」
(東京理科大学 伊藤香織)
日時：2022年5月29日(日) 13:00-15:00
場所：金石スタジオ
料金：無料
参加者数：14名

●Vol.2 データから見る 『金石らしさ』とこれからの可能性

第一部：
「データからみた、金石の少し先の“未来”」
(東京理科大学 高柳誠也)
第二部：
「これからの金石の展望」
(地域の方々 6名)
場所：金石スタジオ
料金：無料
参加者数：16名

東京理科大学工学部建築学科 伊藤香織研究室

東京理科大学工学部建築学科で都市計画・都市デザイン・都市解析などの分野の研究をしている研究室。調査・分析・モデル化を通して都市を捉え、デザインを通して都市を構想している。主な受賞に、まちの活性化・都市デザイン競技(国土交通大臣賞(2013)、まちづくり月間全国的行事実行委員会会長賞(2014)、公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞(2015))、日本都市計画学会年間優秀論文賞(2010, 2017)など。

調査メンバー

天野航一/坂口太一/中積弥恒(東京理科大学 工学部建築学科)

研究責任者

伊藤香織(東京理科大学 工学部建築学科 教授)
高柳誠也(東京理科大学 工学部建築学科 助教)

サポートメンバー

一谷和希/常泉佑太
(東京理科大学大学院 理工学研究科建築学専攻 博士課程)
金沢優輝/孫 溪澤/東裕花里/結城和佳奈
(東京理科大学大学院 理工学研究科建築学専攻 修士課程)

調査報告会・ディスカッションシリーズは
「自治区ラジオ」にて、アーカイブ配信中



東京理科大学 伊藤香織研究室の金石での調査は卒業論文としてまとめられました。調査報告会での地域の方との意見交換も踏まえた梗概をここに掲載します。

児童期の遊び場からみる地域の構造と変化 ～金沢市金石を対象として～

東京理科大学工学部建築学科
天野航一 坂口太一 中積弥恒

1. 研究背景と目的

日本海に面した港町である金石は、江戸から明治にかけて北前船の寄港地として勃興し、戦後は漁業と材木業を中心に栄えた。1970年代には200を超える商店が立ち並び、同時期には料亭、旅館、温泉施設、海水浴場や遊興施設なども存在し、にぎわいをみせた。しかし、基幹産業の衰退ならびに宅地化の進行、若年層の流出などにより、様々な店や施設が姿を消し、現在では閑散とした通りが目立つなど地方都市郊外の様相を呈する。

本研究では、この数十年で大きく変容してきた金石のまちの性質を捉えるために、機能に強く囚われずまちに遊び場を見出していく児童に着目し¹⁾、金石を対象として児童期の遊び場の場所選択を通して、金石の特徴的な地域要素の位置付けとその変化について考察することを目的とする。なお児童期の設定は、比較的行動が多様化し始める小学生時代に限定する。

2. 文献調査による空間構造の把握

2-1. 対象地

金石は1943年に金沢市に編入され、その後の高度経済成長による宅地化でまちの範囲が拡大した。1968年の住居表示法で町名整理がなされるまでは44の町字に区別されていた。この区分は現在でも住民間で使用されているため、本研究では44の町字からなる敷地一帯を金石と呼称して扱う。また、宅地化が進行する以前1909年時点の範囲を旧市街地、それ以外の範囲を新市街地と定義する(図1)。2021年現在の金石の面積は1.13km²である。金沢市住民基本台帳データ(2021年)より人口は約7100人、世帯数は約3150世帯である。

2-2. 道路形成年代の特定

旧市街地における街路は複雑に入り組む一方で、新市街地における街路は直線的である。そこで街路の形成過程を把握するため、表1の資料をもとに現在ある道路を形

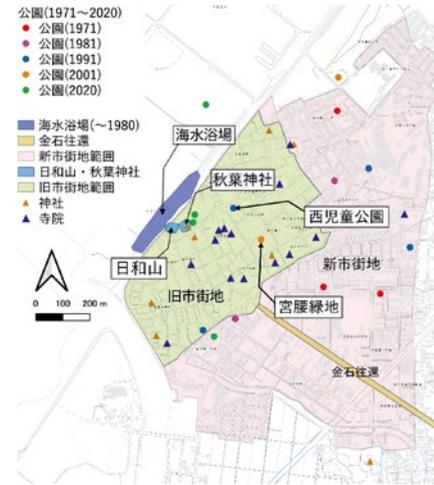


図1 分布対象地の範囲と各事物の分布



図2 形成年代別道路の評価図

形成年代	～1909年	～1930年	～1957年	～1968年	～1973年	～1977年	～1983年	～1988年	～1994年	～2000年	～2011年	～2020年	計
距離(km)	11.9	0.3	7.6	3.7	4.4	0.5	6.4	0.5	1.2	1.6	0.9	0.8	39.9
割合(%)	29.8	0.7	19.2	9.4	11.0	1.3	16.2	1.4	3.1	4.0	2.2	2.0	100.0
累積割合(%)	29.8	30.4	49.6	59.0	69.9	71.2	87.4	88.8	91.8	95.8	98.0	100.0	

表2 道路の形成年代の割合

成年代で区分した(図2)。また、図2を基に年代ごとの道路の総距離と割合を整理した(表2)。これより1957年までに現在の道路の約49%、その後1983年までに約38%が形成され、1983年以降は新規の道路整備はなく、現在までの約40年間はほぼ同一の道路形状であることが判った。また1616年の道路は金沢城下との間を直線で結ぶ約5kmの往還(金石往還)であり、旧市街地と金石往還の接点が当時の金石の玄関である。

2-3. 地域要素

2-3-1. 海岸

遠浅である金石海岸は1897年に秋葉神社および日和山付近の砂丘に海水浴場が創設され(図1)、浜茶屋も多く並び賑わった。しかし1980年頃には水質汚濁の影響で遊泳が禁止となり、1996年以降は金沢港の整備による埋め立てが行われ、現在では沿岸道路沿いに設置された防風柵によってまちと隔離した場所となっている。

資料	年
都市計画図	1957
ゼンリン住宅地図	1971, 1981, 1991, 2001, 2011, 2020
地形図	1909, 1930, 1947, 1957, 1968, 1973, 1977, 1983, 1988, 1994, 2000

表1 資料

2-3-2. 公園および寺社の分布

児童期の遊び場のひとつとして想定される公園の整備年代と位置情報を、表1で用いた住宅地図より把握し(図1)、各年代の総数を表3にまとめた。1991年以降に大きく増加していることが判る。また対象地内には8つの神社と14の寺院があり、これらも遊び場として想定されるため、図1に位置を図示する。寺社の配置および総数は1971年から不変である。

2-3-3. 商業機能の配置と変化

商業機能の分布を捉えるため、1971年～2020年までのゼンリン住宅地図より各年代の商店(飲食店を含む)の軒数を整理し(表3)、位置を地理院地図標準地図上にプロットした。これをもとに、各交差点間を1本の街路と定義し、それぞれの街路に面する商店軒数を街路のラインデータの属性に付与し、その属性値に応じて濃淡で表現することで、各年代における商業的な機能の分布と変化を把握した(図3、4)。以降は1971年時点で最も商店数の多い(15件)2つの街路をメイン通りと定義し、同通りにおける商店数の推移も表3に示す。

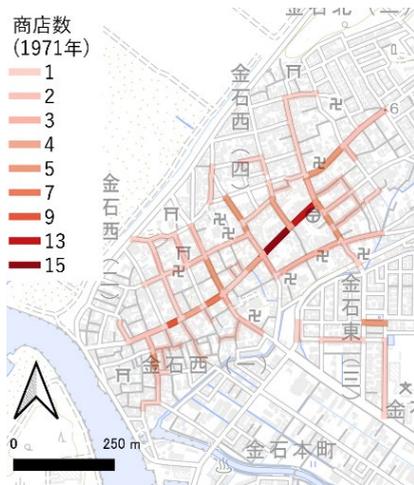


図3 1971年の商業機能の配置



図4 2011年の商業機能の配置

	1971年	1981年	1991年	2001年	2011年	2020年
公園	3	5	9	11	11	15
飲食店	16	17	22	16	12	10
商店	208	153	155	92	80	32
計(メイン通り)	224(30)	170(28)	177(19)	108(12)	92(11)	42(2)

表3 公園・商店数の推移

3. インタビュー調査

3-1. 調査概要

2021年10月23日から31日まで、居住者および金石に居住経験のある者を対象に、児童期の遊び場についてのインタビュー調査を行った。対象者の児童期に適合する地図(表1)を掲示し、調査員が地図上に遊び場を記すという形式をとり、質問項目は表4のように設定した。また現在まちで過ごす場所についても質問した。この内、②～⑤は目的を伴わない、遊び場の選択行動と同質的な行動としての項目であり、⑥⑦は住民が対象地をどの程度利用しているかを把握するための項目である。なお対象地範囲以外の場所も回答可能とした。

3-2. 児童期の自宅と遊び場の位置関係

回答者の児童期の自宅と遊び場の位置関係を把握するため、各世代における自宅から遊び場へのベクトルを作成し、旧市街地の範囲を重ねた(図5)。50代以上では旧市街地と海岸に遊び場が集中する傾向が見られた。これを定量的に把握するため、旧市街地、新市街地、海岸、金石外の遊び場の割合を求めた(図6)。これより旧市街地と海岸の合計の割合は50代以上の方が40代以下よりも高いことがわかった。また、50～60代では70代以上に比べて、海岸の割合が減る一方で、旧市街地の割合が増えていることがわかった。

3-3. 現在過ごす場所の簡易集計

項目②～⑤の全回答場所の選択割合を、

3-2同様求めた。その結果、金石外の割合が約44.4%であることから、相対的に現在はあまり金石の中で過ごしていないことがわかった。



図5 50代以上の世代の児童期の自宅と遊び場の関係

児童期に関して (有効回答数:49)	① 小学生時代に遊んでいた場所
現在に関して (有効回答数:55)	② 健康のために行く場所 ③ 一人になるために行く場所 ④ 暇つぶしで行く場所 ⑤ 誰かと会話をするために行く場所 ⑥ よく行く場所 ⑦ 気軽に立ち寄る場所

表4 質問項目と有効回答数

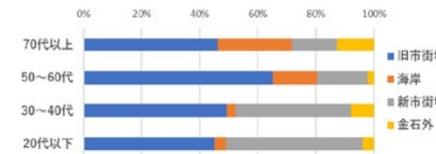


図6 回答された遊び場の旧市街地内外の割合

4. 世代ごとの遊び場の比較

4-1. 種別ごとの遊び場の世代間変化

インタビュー結果をもとに、世代ごとの遊び場の種別の割合を算出したものが表5である。各世代においてもっとも選択される遊び場は、70代以上が「海岸」、50～60代が「神社」、40代以下が「公園」となった。また、各世代における遊び場の上位は、50代以上が「海岸」「神社」「街路」、30～40代が「公園」「神社」「商店」、20代までが「公園」「商店」となった。40代から下るにつれて海岸の選択割合が減少しているのは、2-3-1より1980年頃に海岸が遊泳禁止になったこと、2-3-2より1991年以降に対象地内の公園数が増加したことが要因と考えられる。

4-2. 遊び場の選択割合の変化

各世代の遊び場の総数に対する各遊び場の選択割合を示す図を作成した(図7～10)。円の大きさはその場所を選んだ人数を表す。50～60代までは特定の遊び場への集中傾向がみられるが、40代以下では世代が下るにつれて局所的な集中が薄くなっていくことが読み取れる。70代以上で海岸および日和山周辺への集中傾向が非常に高く、これは50～60代においてもほぼ同様である。また30代以下では新市街地にも遊び場が集中するようになる。これは新興住宅の形成とそれに伴う公園の整備が要因と考えられる。また、世代間の遊び場の重心位置をみると徐々に北東方向に推移していることがわかる。これは金石の核となって

世代 (サンプル数)	～20代 (22)	～40代 (10)	～60代 (10)	70代～ (11)
海岸	5.3	3.0	14.9	27.5
神社	6.6	15.2	27.7	22.5
公園	50.0	34.8	8.5	0.0
林	3.9	3.0	2.1	10.0
河川	1.3	0.0	2.1	0.0
水路	5.3	7.6	0.0	5.0
公共施設	6.6	6.1	6.4	7.5
商店	11.8	18.2	12.8	7.5
街路	3.9	9.1	14.9	15.0
空地	0.0	1.5	2.1	0.0
室内	3.9	1.5	4.3	0.0
その他	1.3	0.0	4.3	2.5

・赤字はその世代において最も高い数値 ・緑字は2,3番目に高い数値

表5 世代別の遊び場の種別の割合

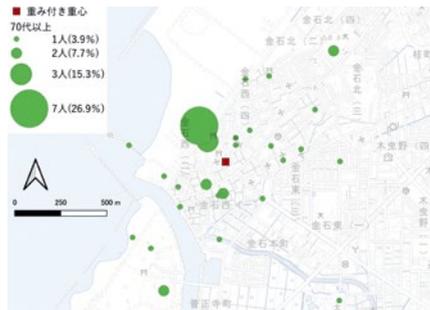


図7 70代以上

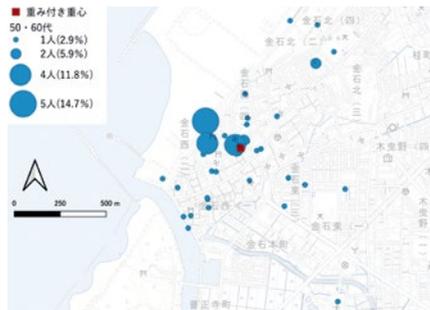


図8 50～60代

	20代以下	30～40代	50～60代	70代以上
エントロピー	4.901	4.749	4.655	3.972

表6 世代を条件とする遊び場のエントロピー

	日和山	小学校の校庭	海岸
エントロピー	1.950	1.922	1.578

表7 遊び場を条件とする世代のエントロピー

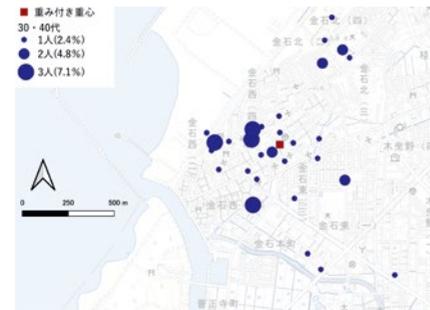


図9 30～40代

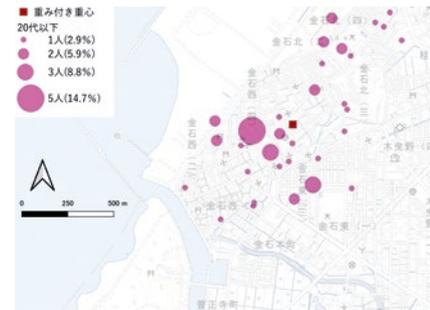


図10 20代以下

いる旧市街地が南西から北東に伸びた形状であり、さらに西南部には犀川が流れており強い境界が存在するため拡散するにあたって自然と北東に移動することになるのではないかと推察される。

4-3. 世代別の遊び場の分散傾向

各世代における遊び場の分散傾向を定量的に分析するため、各遊び場の全体に対する選択確率から、世代を条件とする遊び場のエントロピー $H(Y|x_i)$ 、遊び場を条件とする世代のエントロピー $H(X|y_j)$ を算出した(表6, 7)。ただし、世代の確率変数を $X = \{x_i\}$ 、遊び場の確率変数を $Y = \{y_j\}$ とし、

$$H(Y|x_i) = - \sum_j P(y_j|x_i) \log P(y_j|x_i)$$

$$H(X|y_j) = - \sum_i P(x_i|y_j) \log P(x_i|y_j)$$

である。

これより、70代以上では遊び場が集中する傾向があり、世代を下るごとに徐々に分散していることが定量的にもわかる^{*1}。また、どの世代にも比較的満遍なく選ばれているのが日和山、次いで小学校の校庭、海岸が世代を超えて遊び場として選ばれている。海岸は一時期遊び場ではなくなったものの、全体を通してみると比較的満遍なく選ばれていることがわかる。

5. 児童期の遊び場からみる地域要素の変化

5-1. 海岸

4-1、4-2より70代以上の世代においては海岸での遊びが非常に集中していることから、当時は多様な遊びが行える親しみやすい場所として認識されていたと考えられる。70代と6代にかかると年代においては、図2より1958年から1968年までの間に沿岸道路が敷設されたことでアクセス性が低下し、海岸や犀川を挟んだ普正寺町での遊びが減少したと推測される。また、30～40代にかけての選択率は減少の一途を辿っているが、20代以下では若干向上する。これは、金沢港竣工に伴う埋め立てが一旦落ち着き、その他の遊び場と同質的に捉えられるようになったためではないかと推察される。

5-2. 商業機能

50代以上では遊び場としての商店の回答率は低い一方で、20～30代では回答率が非常に高い。メイン通り周辺での変化に着目すると、公園の整備が挙げられる。旧市街地内に初めて整備された公園（1991年）である金石西児童公園と、2001年に大型商店の跡地につくられた宮腰緑地である（図1）。どちらの公園も30代以下の世代での利用が高いことから、遊び場の回答として商店が見られるようになったのは、公園が商店の近くにつくられ、組み合わせで利用されるようになったことも一因と考えられる。これより2000年頃までのメイン通りは大人が買い物をするための場として認識されていたが、公園の整備により商業がある

が子供にとっても身近な場所として認識されるようになったと考えられる。また、10代の遊び場での回答に商店が含まれないのは、商店数の減少により、買い物をする場所としても認識されなくなったためではないかと推測される。

5-3. 集中と分散

金石内の商業機能が大きく減少していること（2-3-3）や現在の住民が過ごす場所の半数近くが金石外であること（3-3）を踏まえると、金石自体の求心力は徐々に低下してきていると考えられる。このことと遊び場が徐々に分散してきていること（4-3）を併せて考えると、かつての金石には大人のための様々な機能が集中して児童の遊び場は自ずと限定的になっていたのに対して、次第に金石から機能が流出してまちなかに児童が遊び場にできる余地が増え分散につながったのではないかと推測も可能である。

6. 居住者との意見交換

以上の調査結果および考察を金石居住者の方々に報告するとともに、調査員・居住者間での意見交換を目的とした報告会を2022年2月27日に実施した。

多数の貴重な意見から新たな可能性がいくつか示唆されたが、特に遊び場の分散および重心位置の推移に対する要因として、①小学校入学以前の行事内での体験が遊び場の認識に影響を与えている（その場所を馴染みやすくしている）、②小学校・中

学校などの校区の変化やかつて存在した上口・下口という地域区分の認識が関係している、という二つの大きな可能性が提示された。したがって、本研究では金石を旧市街地と新市街地に区分していたが、異なる集計方法によっては、新たな遊び場の選択傾向あるいは分散の事由に対する新規の仮説が提唱できると考えられる。

7. 総括

本研究では、金石における居住者の児童期の遊び場について、世代によって遊び場の選択傾向が異なること、世代を下るにつれて徐々に分散していること、重心位置が移動していること、各世代に共通して選択される遊び場が存在することが定量的に明らかになり、これより地域要素の位置付けとまちの構造および変化についての考察を試みた。

金石の特色として真っ先に挙げられるのはコミュニティの結束力と考えられる。これは意見交換会の随所でそのような趣旨の発言が多く見られたためであるが、「格式が高い」「協力的」というポジティブな表現が出る一方で、「おせっかい」「出る杭は打たれる」などのネガティブな表現も多く見られた。これは、金石は祭りを始めとする伝統的なしきたりを重んじる傾向があり、常にまちの中での動きに高い関心を持っていたことに由来し、それにより外部からの動きに対しても敏感になるためであるとされる。しかし一方で、金石スタジオのように金石内部の住民が主体的に参加する動きであれば、自ずと金石の活動の一部として定着し、より発展させられるのではないかという意見もあった。したがって、そうした結束力を金石の社会的なポテンシャルとし、調査で得た空間的なポテンシャルと合わせて金石の将来像を考案・精査していくことが望ましいと考えられる。

補註

※1 全世代で一人当たり平均5.5カ所、30～40代では63カ所のうち回答者ID=28が回答したものが21カ所、それ以外の9人が挙げたものが42カ所であり、回答者ID=28を加えるとサンプリングに著しい偏りが生じるため除外した。

参考文献

1) 須藤里佳、伊藤香織、高柳誠也（2020）、児童期の行動の記憶からみた空間変容と場所認識に関する研究：港区青山地区を対象として、日本建築学会大会学術講演梗概集、都市計画、483-484。

謝辞

本調査における総括的な立場から各企画立案・実行に対して多くのご助言をくださった中田耕市様、細かな日程調整や人脈確保など調査活動において多大なる援助をくださった河合紗那様、調査の広報をお手伝いして頂いたかなラボの皆様、快適な調査環境を無償で設定して頂いた児童館の皆様、そして何より調査に快く協力して下さいました金石在住の皆様、あらためて深く感謝を申し上げます、本当にありがとうございます。

金石のまちに期待すること

—空間と社会の観点から

伊藤香織

東京理科大学 教授

金石は様々な性質が重なり合っているという印象は、初めて金石を訪れたときからあまり変わらない。歴史的には、金沢城下の外港、漁村、大野湊神社の鎮座地、遊興街として、現在は歴史を色濃く残しながらも商業施設への自動車アクセスが良い金沢郊外の住宅地、祭りが盛んで結束力の強い地区として、様々な顔を持っている。小学校の児童数減少に象徴される地域の衰退を案ずる声も聞かれる。しかし、周辺地域に比べると相対的に人口減少幅や高齢化の進行が早いものの、いずれも全国平均に近い水準である¹⁾。したがってことさら嘆くこともないし、かといってこれまでのやり方を無批判に続ければ良いというわけでもないだろう。これからの金石のまちを考える手掛かりとして、金石の特徴を概観してみよう。

まず、空間的な特徴として、稠密なまちなみが挙げられる。特に街路に直接面して間口の狭い建物が建ち並ぶ様子は、歴史的かつ都市的なまちなみをよく表している。また、不規則な街路幅員、直線的ではない街路線形、直交しない街路網がまちなみに独特のリズムを生み出している。こうした稠密さや街路形状は、ヒューマンスケールで歩いて楽しい魅力的な空間を作り出す。概ね徒歩圏に町内が収まっていることも特徴的である¹⁾。一方で、自動車交通にとってはいずれも不便さの要因になっているだろう。

次に、社会的な特徴として、祭りを中心にして地域コミュニティのつながりが強いことが挙げられる。意見交換会(2022年2月27日)でも、「連帯感」「団結力」「隣近所との交際が密」といった意見が多く出された。近年、社会的な孤独・孤立の深刻化に伴い地域コミュニティの重要性が再認識されている。また自然災害が激化するなかで、平時からコミュニティの交流があることが非常時にも強靱な地域を作ると言われる。一方で、強すぎる地域コミュニティが煩わしく思われることも少なくないだろう。意見交換会でも「おせっかい」「すぐ噂になる」「出る杭は打た

れる」といった意見も聞かれた。

このように、空間や社会の特徴は金石の価値をかたちづくっている反面、現代の都市生活にそぐわず不利に働いているようにも見える。では、金石のまちはこれからのまちづくりでこうした特徴を払拭していくべきなのだろうか。

ここで都市空間と自動車との関係を大づかみに振り返ってみる。ヨーロッパで生まれた近代都市計画の考え方は、居住、労働、余暇などの機能を分離して、それらを当時の新たな交通であった自動車交通で結びつけるという都市像を描き、瞬く間に世界中に広がった。徒歩中心の生活に適した近代以前からの中心市街地にも自動車が我が物顔で入り込み、結果として人けのない打ち捨てられたまちとなった。日本では実感が薄いかもかもしれないが、この打ち捨てられた中心市街地の状況は、ヨーロッパの都市では苛烈であった。だからこそ、まちなかをふたたび人のための空間として取り戻そうという機運が高まり、早くはコペンハーゲンやミュンヘンのように1960年代から変化が始まり、多くの都市では1990～2000年代にはその効果が現れ始めた。

さらに近年では、徒歩15分程度で移動できる範囲に生活に必要な機能が揃っている「15分都市」を目指すことを掲げる都市が増えている^{*1)}。特にCOVID-19感染症拡大による世界的な行動制限で身近な地域に目を向けざるを得なくなり、地域での暮らしやすさへの関心が高まっている。これまでも類似の概念は多く提示されてきたが、抽象的な都市像としてのコンパクトシティではなく具体的な生活像としての「15分都市」が求められるようになってきているのは大きな変化だ。「15分都市」には機能混在だけでなく、自ずとコミュニティの概念が含まれる。たとえばパリ市は「15分都市」プロジェクトの一環として、校庭を授業時間外に開放し、近隣住民に新たな交流の場を設けることで社会参加を促す計画を発表した²⁾。個人々が思い思いに過ごせる場所というだけでなく、市民プロジェクトの共創や「ともに生きる」場となることが期待されている。

こうした経緯や潮流を改めて振り返ると、金石の特徴は、払拭すべきものではなく活かしていくべきものだけだということがわかる。実際のところ、金石の不規則な街路網などによって生じる空間性は、現代のアーバンデザインが強く求めても容易に得られないような質を持っているのだ。

現在、都市社会のあり方は、近代都市計画の呪縛から逃れようとしているようにも見える。しかし、それは近代以前の姿に戻すことを意味しない。たとえば、コペンハーゲンの人間中心のまちづくりに携わり、今も世界中で活躍するアーバンデザイナーのヤン・ゲール氏は、次のよ

うに説明している。伝統的な都市空間は「交流、商業、交通がそれなりにバランスして共存」していたが、自動車に占拠され人に見捨てられた都市空間を経て、現代の都市空間は「交流、商業、交通の新たなうまくいくバランスを見出す多大な努力が払われ」た結果再び勝ち取られた³⁾、と。この「新たなうまくいくバランスを見出す」ことがひとつのポイントだ。金石ではどうだろうか。

(1) 交通モードの新たなうまくいくバランスを見出す

徒歩、自転車、自動車など複数の移動手段を日常的に使い分けること。いつも自動車に乗っている人といつも歩いている人がいるのではなく、一人ひとりがときと場合に応じて移動手段を適切に選ぶことによって、まちなかに人が増えるだろう。なぜなら、金石のまちの形は、徒歩や自転車の方が圧倒的に適しているからだ。近い場所にでもつい自動車を出してしまうように、自動車には常習性があるようなので、まずは意識的に移動手段を選ぶと良いだろう。さらに、将来的には多様な交通モードが社会実装されてくる可能性が高く、車椅子からキックボードまで様々な移動手段が使いこなされていくかもしれない。

(2) 機能の新たなうまくいくバランスを見出す

かつて金石には、港や多くの材木商の倉庫があり、様々な商店や銀行、料亭や娯楽施設もあって、居住、労働、余暇などの機能が近接したまちであった。かつての状況を金石が取り戻すのは現実的ではないだろう。しかし、近年、居住、労働、余暇の境界は、空間的にも時間的にも曖昧になってきていると言われる。コロナ禍でにわか増加した在宅でのリモートワークやコワーキングスペースはもちろんのこと、趣味や特技を活かした地域での小商いも注目を集める。働く姿が垣間見えるだけで、まちの息づかいは変わる。まちなかで住民の個性のにじみ出す店舗や居場所は、大型ショッピングセンターとは使い分けることができるだろう。立ち寄り先がまちなかにあれば人はまちに出るし、人の活動の気配が窺われる軒先やミセ空間が一定距離以内の間隔で続く道は先へ先へと歩きたくなる。まちに様々な機能が埋め込まれることは、金石のまちの形を活かすことに繋がる。

(3) 人のつながりの新たなうまくいくバランスを見出す

従来コミュニティといえば地域コミュニティのことを指していたが、今ではテーマ型コミュニティの趨勢が強く、さらには地理的近接性に

囚われないヴァーチャルコミュニティの存在も大きくなっている。一方で、インターネットを介したつながりは自分と似た意見・思想・価値観が増幅強化される閉じた場になりがちであることが知られている。だからこそ、それらのバランスが重要になる。たとえば地方移住者は顔の見える地域コミュニティとSNSでつながる広いコミュニティの二層のコミュニティを持つことで移住生活を成立させているという調査報告もある⁴⁾。金石では、「自治区 金石大野芸術計画」の活動を通して、開かれながら求心力のある地域の芽は育っているのではないだろうか。

ヤン・ゲール氏が「多大な努力が払われ」たと述べているように、こうした新たなうまくいくバランスを見出すのは容易ではない。新たなうまくいくバランスは地域ごとに異なるので、地域住民や地域に関わる人たちが自分たちで探りながら、創造的に見出していくしかない。それについて私自身は悲観的ではない。歴史的に重層する生活・文化資源を受け継ぎ、一方で現代アーティストを迎え入れることのできる金石のまちには、金石らしい新たなうまくいくバランスを見出していくことができると期待している。

補註

※1 バリの「la ville du quart d'heure (1/4時間都市)」やメルボルンの「The 20-minute neighbourhood (20分近隣)」など

参考文献

- 1) 高柳誠也 (2022), データからみた、金石の少し先の“未来”:多声的なまちづくりに向けて、金石ディスカッションシリーズ発表資料。
- 2) La Maire de Paris (2021), PROJET DE DELIBERATION EXPOSE DES MOTIFS: Approbation du Règlement Intérieur d'utilisation des cours d'école et de collège ouvertes au public les week-ends.
- 3) Jan Gehl & Lars Gemzoe (2003), New city spaces, The Danish architectural press.
- 4) 旦那ゆみ, 岡部佳世 (2020), 移住者が定住するための条件を探る: 気仙沼市転入者アンケート調査より, 常磐総合政策研究, 6, 63-76.

伊藤香織 [いとう・かおり]

東京生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士(工学)。東京大学空間情報科学研究センター助手等を経て、東京理科大学教授。専門は、都市空間の解析及びデザイン。特に公共空間と都市生活の関わり方に着目する。2002年より東京ピクニッククラブを共同主宰し、国内外の都市で公共空間の創造的利活用促進プロジェクトを実施する。シビックプライド研究会代表として『シビックプライド』『シビックプライド2国内編』(宣伝会議)を出版。

●イベントからふりかえる地域のまなざし①

このまちに住むわたしたちの展望

—東京理科大学 伊藤研究室 ディスカッションシリーズより

2022年7月24日 金石スタジオにて

2022年は最終年度として「活動をつなぐ」をテーマに、今後の展開を探りました。「東京理科大学 伊藤研究室 ディスカッションシリーズ Vol.2 データから見る『金石らしさ』とこれからの可能性」の第二部では地域の方6名から展望をお話いただきました。ここではその中から3名の方々のお話を紹介します。

金石手芸部 部長・北村陽子さん

「かないわ楽座」で発足した「金石手芸部」は、当時は作家の宮田明日鹿さんが部長をされていました。現在は私が引き継がせていただきまして、金石の部活として、商店街の旧田村化粧品店さんで活動をしています。

活動は月2回。金石の町の方も、町の外からも参加される方がいて、幼稚園や小学校くらいのお子様から、子育て世代のお母さん、子育てが終わったお母さん、あとはお年寄りの方、男性の方もいらっしゃいます。さまざまな方が、手芸という共通の趣味を通して、一つの場所に集まって毎回楽しんでいきます。手芸部と言っても、話しているのは料理のことだったり、町にこういうお店ができたらしよとか、世の中の話とか、手芸に特化したものではなくて、情報交換の場になっています。展望というように大それたものではないんですが、今後活動も続けていけるように、場所をお貸



北村陽子さん

しいだいている田村さん、協力しながら一緒に部活を盛り上げてくださっている部員の皆様とともに、今後も継続して暮らしの中に溶け込んだような部活として活動できたらなと思っています。

金石の本龍寺さんという大きなお寺に張子のゾウさんがいるんですが、今後の取り組みとして、そちらのお召し物を一緒に手芸部で作らないかという話が来てます。高さが2メートルくらいの大きなゾウなんですけど、部員の皆様と一緒に考えながら形

にしていけたら、地域にとっても、暮らしを豊かにするような活動につながるのではないかなと思っています。

部員は随時募集しています。特に登録も

要らないので、1回でも参加された方は皆さん部員になる仕組みです。手芸ができない方も苦手な方も、話をしに来るだけでもいいので、ぜひご参加ください。

駄菓子屋・齊藤紀子さん

毎月第2・第4土曜日に、金石スタジオで駄菓子屋をさせていただいています。7月9日(2022年)の北國新聞に掲載してもらいまして、そのあとのオープンの時は大繁盛しました。

駄菓子屋を始めたのは、金石スタジオのコンテナで(地域コーディネーターの)河合さんが駄菓子屋をしていた(p.64)のを息子たちと見に行ったのがきっかけです。息子が駄菓子を気に入り、お会計をしている姿を見て、お手伝いしたいと言い出したのです。さっそくお願いをして、2日間お手伝いさせていただきました。ゲームの大好きな息子だったので、駄菓子屋ならやってみようということだったので、こちらのスタジオをお願いして、月2回駄菓子屋をやらせていただくようになりました。

駄菓子屋という活動もだんだんと定着してきていてとてもいい感じなのですけれど、今後もう一つ、やりたいことがあります。駄菓子屋の横にフリースペースやワーキングスペースをつくって、Wi-Fiを飛ばし、大人の方が仕事をする場所の他に、学校に行けない子どもたち、いわゆる不登校の子たちが家の外に出る機会を作りたいで



齊藤紀子さん

す。引きこもりにならないように少しでも外に出て、そこで勉強もする。そして、学校から帰ってきた子たちと入れ替わって、学校に通う子どもたちも午後から勉強や宿題をするなり、「おばちゃん、おばちゃん」って話しかけてくれたりする場所がいいと思っています。この地域には趣味や手に職を持っている方がたくさんいるので、土日はその方々に格安で、例えば整体やネイルをやってもらおうとか、あとはフリーマーケットとかもできるような場所を作りたいなという展望があります。

ただ、駄菓子屋は10円のうまい棒でも利益は1円しかないもので、なかなか家賃を払ってまでできないという点が今後の課題です。でも、駄菓子屋はずっと続けたいと思っています。

にわ部メンバー・番匠由美子さん

私は金石に来て、30年ほど経ちます。仕事は、畑とは全然関係なくて経理の仕事をしています。ここに畑ができると聞き参加して、現在まで意外と長く続いているなと思ってます。区画は20区画で、部員は10人。

なぜ私がこんなに長く活動を続けられたのか。振り返って思うと、意外とこの場所の環境が良かったからなのだと思います。自分で自由に作れるし、困ったら相談に乗ってくれる人がいて、金石スタジオに行けば誰かと話せるという、社会のつながりとか家族のつながり、友達つながり以外のつながりというのが、私にとってホッとする場所でした。なので、毎週行って、ここでいろいろ作ったりしていました。

今後また引き続きにわ部としてこのスタジオを使用したいと大家さんと相談しているところです。思えば、この場所は昔は草原みたいに草がいっぱいあって、北風が非常に強くて、砂も飛んできて歩いている人も誰もいない寂しい場所でした。ここに畑ができたことで種を撒く人ができて、そこで苗を植えて、そしたら綺麗にした

いって人がいて、草刈りをする人がいて、花壇に花を植えて、気が付けばスタジオに多くの人が集まってきている。そういう状況です。

私がこの先、どうしていくといいだろうかと考えていると、協力してくれる人が集まってきて、アドバイスやアイデアをいっぱい出してくれます。私もいろいろと再発



番匠由美子さん

見しています。

この先もここで畑を使えば、採れたての野菜と一緒にみんなで食べたり、販売してみたり、種撒きで育てる楽しさを知ってもらったり、収穫体験だけでなく、収穫祭とかいろいろな行事もしていきたいなと思います。若い人から年配の人まで、誰かと話したいなと思ったら気軽に来れて、誰かとつながっていると思えるような、そういう場所になってほしい。この場所でほっこりとした場所を作っていきたいと思っています。



地域の方のお話の後に行われた意見交換の様子

●イベントからふりかえる地域のまなざし②

プロジェクトの終了を前に

—「金沢21世紀美術館と本龍寺」より

梅原 顕 (本龍寺住職) × 河合紗那 (自治区 金石大野芸術計画・地域コーディネーター)

2022年9月25日 本龍寺にて

「自治区 金石大野芸術計画」が終了となる2022年9月に実施された本龍寺の「二十五日会」で、本プロジェクトにさまざまに関わっていただいた本龍寺住職の梅原顕さんと「自治区 金石大野芸術計画」地域コーディネーターの河合紗那さんが、これまでの活動を振り返りました。地域のみなさんも耳を傾けた対談の中から、一部を紹介します。

河合：梅原さんはこれまで、アーティストと触れ合うことはありましたか。

梅原：普段の生活していてアーティストとお会いすることはほぼなかったです。美術館に行くことはありますが、作品を作ったご本人と会ってお話することは初めてでした。

河合：私自身も今はコーディネーターという立場ですが、やはり、アーティストと直接話す機会は普段の生活ではありませんでした。この「自治区 金石大野芸術計画」というプロジェクトでは、アーティストが地域に滞在したり、地域をリサーチしたりと距離の近さというのも特徴の一つかなと思います。梅原さんがアーティストと触れ合って、感じたことはありますか？

梅原：アーティストが初めて金石を訪れたとき、町のことを説明するにあたって私

もご一緒させてもらいましたが、どの方も、熱心にこちらのお話を聞いて下さり、町の歴史に対しても関心の深さが伝わってきましたし、金石の町自体を尊重して頂いている印象を持ちました。

河合：アーティストは金沢21世紀美術館が選定しているんですが、やはり、地域の方とのコミュニケーションや歴史文化に興味関心を持っている方が多かったですね。

梅原：金石は昔からお茶や、謡や俳句を嗜んでいる人が多いので、おそらく生活の中で芸術に触れる機会はあるんですよ。ただ、現代美術となると、私も初めは「どんなのかな、やっぱり少し複雑なのかな」という印象がありましたがアーティストに会ってみると、皆さん親しみやすい方ばかりで、地域とコミュニケーションをとりながら一緒に作品を作っていこうとされてい



本龍寺住職の梅原顕さん

ましたね。

河合：現代美術って聞くと、首をかしげる方も多いかもしれませんが、例えばよく買い物に来る兄ちゃんが「作品作ったし、見に来て！」という近い距離感で声をかけられたら、美術に縁のない方でも行ってみようかなってなりますよね。人を知ることで物の見方が変わるのかもしれないね。

梅原：まして今回は金石を題材に制作していただけたのでとても親しみが持てました。さきほどもお話しましたが、アーティスト自身が町のことを調べて、町の方々と向き合おうというのが感じ取れましたし、みなさん町のルールを学びながら作品を制作していこうとして頂けたので、とても接しやすかったですね。

河合：2018年からこれまでいろいろ続けてきた「自治区 金石大野芸術計画」ですが、この9月で美術館の活動としては一区切りとなります。金石スタジオは町の方が引き継いでくださる予定なのですが、梅原さんとしてはどのようなことを思っていますか。

梅原：普段は触れる機会がないものに触れたので、多分このプロジェクトを私が一番楽しんだのではないかと思います。作品でお寺を使ってもらったり、アーティストも近くにお住まいだったので、生活の中でお話することも多く、本当にいい経験でした。今回滞在されたアーティストは皆さんポジティブで、話を聞いていると、こちら前向きになるというか。町の人は、町のいい面を知っているけれど、同時に悪い面も気になったりするんです。けれど、アーティストの皆さんには私たちが思っていることとは違うようなところを見せてただけだったので、とても勉強になりました。この二十五日会にしても、きっかけは「自治区 金石大野芸術計画」のコーディネーターをしていた方と話をしている中でやってみようとなった企画なので、私としては本当にいい影響を受けたんじゃないかな、と思っています。

河合：そう言っていただけると嬉しいです。

梅原：アーティストの方々が滞在していたことを知っていた方も、知らなかった方も、何をしていたか今日初めて知った方もきっといらっしやると思います。初めて



地域コーディネーターの河合紗那さん

知った方にとっては、もう終わってしまう話になるんですけど、例えば、ボランティアガイドのみやのこしまちさんは今後アーティストのムン&チョンが制作したマンホールのことを紹介するでしょうし。いろいろな影響が少しずつ出ているんじゃないかなと思います。河合さんはどう思いますか？

河合：アーティストが地域のことをポジティブに捉えられていることが面白いと思いました。同時に身近すぎて、私たちが見落としてることがたくさんあるんだなとも思いました。協力してほしい時、町の方に声をかけるとちょっと文句いいながらも最終的には楽しんで手伝ってくれるんです。人の力や魅力を改めて感じました。

梅原：金沢港クルーズターミナルができて、金沢市としても盛り上げていきたいとか、観田(康宏)さん(p.90-)を中心にまちづくりをしていこうというチームができたり、アーティストたちが来られたタイミングも良かったのかなと思います。金石の人たちはなにかあった時には手助けしてくれる方々ですし、なにかやってみよう、表現してみようということが「自治区 金石大野芸術計画」をきっかけにできつつあるのかな。終わっちゃうのは残念ですけど。

河合：本当ですね。でも幸い4年以上続けて来て新たにできたつながりもあります。今日初めて知った方も、こんな

活動が自分の町であったということ、心の片隅に留めておいていただければ嬉しいです。私たち若い世代は皆さんのお知恵も借りながら、美術館をきっかけにできた新たなつながりを生かしながら活動を続けていけたらと思っています。

梅原：事業としては9月で終わっても、河合さんはこれからも金石で活動されていくと思いますし、みやのこしまちさんも観光ガイドを続けていけます。お寺でもこの二十五日会を含めいろいろ活動していくつもりですし、皆さんの中からも地域で活動するような人たちが出てきたりしたら楽しいですね。きっと、こういうプロジェクトがあったことでいい方向に進んでいくと思いますので、これからも皆さんとなにか作り上げられたら嬉しいです。

河合：そうですね。引き続きいい町にしていきたいましよう。



本龍寺でのトークの様子

●対談

「自治区 金石大野芸術計画」は 地域に何かをもたらしたのか？

観田康宏（株式会社観田創建 代表取締役）× 鶴山雄一（加賀建設株式会社 代表取締役社長）

2022年12月5日 zoomにて

金沢21世紀美術館が「自治区 金石大野芸術計画」を進めるにあたり、地域のコミュニティとつながるためにさまざまに協力してくださったのが加賀建設（株）代表取締役社長・鶴山雄一さんと（株）観田創建 代表取締役・観田康宏さんでした。お二人ともに地元の企業として地域に貢献されているほか、有志のまちづくり団体「かなラボ」の一員としても活動されています。お二人に、「自治区 金石大野芸術計画」をふりかえっていただきました。

観田：「自治区 金石大野芸術計画」が始まる頃は我々若い者たちで金石のまちづくりをしよう、でも何をしようかというタイミングでした。話を聞いて、具体的な場所や資源を見つけていかなければならないと同時に、何か新しいものがプラスされて、金石のよい部分がより活かされる形で変わっていくといいなと、期待感を持ちました。

地域の人口が減り、子どもたちは少なくなり、お店はなくなっていく。消失感と不安感が将来の不安を作り出していると感じていました。新しいことが始まるということで、起爆剤じゃないけれど、たとえ爆弾みたいな毒みたいなものであっても、そこから何かが生まれてくると思いました。なくなるばかりでは、その何かは生まれてこないですよね。そこからなのではないかと。

鶴山：私は金石をどうするか、自分たちで

はなく、次の世代に対してどのように町の質を高めていくかを考えていました。その中で教育や文化事業が重要になると考えていましたし、金沢21世紀美術館がこの町に関わりを持つことは町の質を高めていくこととつながっていくと、大いに賛成をしたというか非常に喜ばしいことだと思ったのが僕の率直な感想です。

アートには物事を考えていく思考や問いかけの思考がありますよね。個々のアーティストの「なぜ？」を伝えていくこと。僕はこれからの子どもたちに「なんでこんなものをつくるんだろう」とか「なんで、こうしたんだろう」って考えるきっかけがあればいいと思ったんです。一人一人の捉え方もあるし、アーティストと思いが違っていいんです。考えていくことが大事であって、そこから自分たちが考えたことを表現し、解決していくような、デザイン思

考を身につける、この両面が必要だと思っています。そういった意味で観光の要素よりも、考える人たちが集まる場所である金沢21世紀美術館の一部が金石に来るというのがとてもいいなと思っていました。

「かなラボ」という団体がありますが、そこへの影響、使命感のようなものを与えてくれたのだと思います。金石スタジオに直接的に関わる人は少なかったかもしれませんが、そこから何か行動しよう、新しいことをやってみようとする人を生んだことは間違いありません。1番印象深いことは、「関わり」ができたことですね。これまでは鑑賞でしかなかったのが、本物のアーティストの皆さんと一緒に作品を作っていくプロセスや活動に関わることができたことはすごく良かったと思っています。僕自身も含めて、関わった人の感性が磨かれたと感じる場面があるんです。見方が少し広がるとか。

観田：全く違う社会性や感性を持った方々が、コミュニティにボンと入ってきてもらったわけですね。多分、すごく苦勞されたと思うんですよ。この地域の中に入ることや作品作りの上で思ったようにならなかったことはあるんじゃないかな。でもそ



うやって価値観の違う二つが会うことで、私はいろんなことを感じたり気づきがありました。特に田口（行弘）さんが滞在された時は本当によくご一緒させていただいて。金石という地域を改めて全く違う角度から見ることもつながり、新しい発見がたくさんありました。地域の人たちもいろんなことに気づかれて、「あ、そうしたらこんなことやってみようよ」と行動やその動機付けにもつながったし、世界を広げ、価値観も広げた機会になりました。ただ、それがなかなか活動として広まっていかなかったのが少し残念で、難しいものだなと感じました。

鶴山：行政が行う事業では対象を「市民」としますが、それだと広すぎて一人一人に届かないですね。価値観が多様化しているのがありますが、（金石スタジオに）出入りしている人にしか届かなかったのはそれが原因だと思います。

金石スタジオをいろいろ使ってもらいたいという、背景は地域としても理解しています。でも狙いはまた別ですね。使ってもらった先にその地域に住む人にどうなってもらいたいのか、どうしてほしいかが多分あると思うんです。そこが少し不明確だっ



左：鶴山雄一さん 右：かないわ楽座のウシジマヒトシ「玉、海に帰る」に参加する鶴山さん（前列右端）



左：観田康宏さん 右：田口行弘さんの活動に参加する観田さん（右から2番目）

たのかな。使ってもらうことでそこにどんな化学変化を起こそうと思っていたのかなという疑問は感じていました。

観田：ゴールは定めず、ぼっと何かを入れた時に、新しいものが生まれてくるかというところが狙いだったのかな。どういう方向に行って、どんなものが生まれていくかは、それはそれで楽しみにすればいい、ということかなと思っていました。実験場＝ラボのようなものでもあったんでしょうね。金石は他の町が持っていないものを、たくさん持っていると思うんです。海や夕日、自然という象徴的なものが身近にあって、伝統があって、そこに食文化や建築文化などいろいろな文化があります。世界規模の魅力ではないですが、たくさん魅力に溢れていて、人の感性やアイデンティティを刺激してくれる要素がたくさんあると思うんです。せっかくそういった恵まれた豊かな環境の中で暮らしているのだから、それに気づかないことはもったいない。そうい

うところを負の要素として感じている人がいるかはわからないけど、それを良い点として皆さんが感じられるといいです。若い人たちが面白いから住みたい、戻ってきたい、となったり、新しい人たちが金石に住もうかなという気になったり、小さなことでも新しい部分が生まれていくような町になると楽しいと思います。

鶴山：僕は今、自分でも恵まれていると思っています。というのは、自分が努力すればやりたいことができる。自分たちの父親やその前の祖父の世代が形を作ってくれたからだと思っています。だからこそ、この町をなんとかしようと。基盤ややりがいは「町」ですからね。今自分が挑戦できることを、次の世代にも引き継いでいきたい。自分たちが課題と感ずることやいろいろな問題があるかもしれないけれど、守っていくものを引き継ぐだけでなく、やりたいことをやれる状況を作っていくことが理想です。

●対談

これまでの金石とこれからの金石

鶴山庄市（金石町校下 町会連合会会長／加賀建設 会長）×能木場由紀子（金石町校下 婦人会協議会会長）
2023年2月8日 加賀建設にて

金沢市西部地域の海沿いに位置する金石・大野は、江戸時代に北前船が往来する海上輸送の要所として栄えた町です。豊かな文化歴史を基礎に住民自治が根付く場所で「自治区金石大野芸術計画」を展開することが出来たのは、そうした素地とまちづくりに関わる団体組織に活気があったことでした。ここでは、地域づくりに長年貢献されている鶴山庄市さん、能木場由紀子さんに金石エリアについてお話を伺いました。

鶴山：東京の大学を出たあと、金沢に帰ってきました。働いていろいろな出会いがあるうちに社会には縦、横、斜めの関係があると気づき、地域にも参画してみようと思いい壮年会（45歳ぐらいままでを対象とした地域団体）に入りました。今と違って喧嘩も派閥もあったけれど、切磋琢磨する雰囲気があり、町のエネルギーを強く感じましたね。

金石の嫌いだだったところは、人の話や噂が多すぎる場所です。金石では関西に近い方を上口、離れた方を下口と呼ぶのだけど、例えば上口の一番端の所で起きたある事柄は、半日くらいしたら、下口が一番端の人まで知ってるんです。これは港町である金石の地理的な特性や、一つの集団としてのまとまりの良さの裏返しかもしれません。

能木場：昔は「屋」のつくお商売屋さんがたくさんあったんです。八百屋さんが軒を

連ねていて、もちろん漁業の町ですのお魚屋さん何軒もありました。建物に関しても傷んだらブリキ屋さんや瓦屋さんに来てもらって。八百屋や魚屋は毎日行きましたね。そこで聞いた話を喋っていると。噂話あたりまえかもしれませんね。

私も小さい頃はよく片手鍋を持ってお豆腐屋さんに行きました。今みたいに全てがバックに入っている時代じゃなくて、八百屋に行けば新聞紙にくるんでくれて。昔はゴミも出なくてよかったですね。お魚のさばいた残りを夜になったら犀川の河口にぼとんと捨てに行ったら、ゴミの袋が山ほど出ることもありませんでした。美味しいものいっぱいあったのに、今はお商売屋さんがなくなって残念に思っています。

鶴山：金石は北前船の寄港地であり、木材の町で土場もたくさんありました。金石の地場産業として特色の一つだったけれど、

建築資材の需要の変化や外材の輸入で成り立たなくなってしまう。金沢市は「木の文化都市」を目指しているのですけれどね。

能木場：木工屋さんもあって、桶や割り箸を作っていましたね。トラックが朝に材料をおろして、仕上がったのを取りに来たり、おばあちゃんが割り箸の面取りをして上等な紙の袋に入れる内職をするようなおうちがたくさんありました。

鶴山：キリコなど、金石では木を使った商品が作られていました。特色だったのに残念です。地域の産業の形態が変わっていくにしても、現状を認識しながらどのようにしていくか考えていかないと。屋のつくお店の話もあったけれど、どこにでも大型商業施設が出てくるのは感心しないです。

能木場：「この店に行ったら、これが美味しい」というものを残しておきたいですね。

鶴山：金石だけではないけれど、人口減少と高齢化の波が押し寄せています。ふぐの粕漬けや糠漬けといった特色のある水産加工物は踏ん張っていますが、町の人口構成や就労形態も変わってきて物売の人が減少しているわけですね。サラリーマンの世帯が増えるほど、自分たちの家庭、生活、個人の時間を大切に、社会の大きな流れがありますね。そうすると噂話は少なくなってきて、町の雰囲気も変わったんだろうと思います。一方で、PTAとか、町会とか、地域社会のお世話に対して関心度合いが落ちてきました。成り手がいない。みんな他人に干渉しない。自分たちの生活を築

く一方で、地域との関わりやつながりを持たなくなっているんじゃないかな。地域社会では衝突もあったかもしれないけれど、それが町のエネルギーや活力になっていたわけで。それがだんだん弱くなってきていると感じます。

この町は旧町名でもものが動いていて、みんなの生活に染み付いているのも特徴です。44の町会のうち、旧町名は30あって、そのうち13の町会が旧町名に復活しました。7年前に運動会を行った時に、隣同士で合同チームにしたらどうですかと尋ねたら、どこの町も結局自分たち単独で出たいと言っていました。復活する・しないに関わらず、これまでもこれからも地域の活動は旧町単位で行うから、自分たちの町会に関心や愛着を持ってほしいです。

祭りや地域のイベントを継続することは、おかげ様でなんとか続いています。初老会も人数は減っているけれど継続していて、そういった中で祭りの運営の一部が担われています。

能木場：昔は夏のお祭りは8月1、2、3日と決まっていた、子どもたちが町に戻ってきたり、嫁ぎ先の家族が来るからと仕事は休みにしてお祭りを盛り上げていました。1週間もしないうちにまたお盆が来るのですね。金石町の各町内会で大きな曳山を持っているところは17、8ですかね。太鼓だけが乗っているのにしても、各町内会が一つずつ、曳山や太鼓台を持ってお祭りに参加するのが、昔からの習わしです。これくらい、お神輿やお祭りをずっと大事にしてきた町なんです。

お祭りというと登場するのが、押し寿司



生まれも育ちも嫁ぎ先も金石の能木場由紀子さん（左）と旅がお好きな鶴山庄市さん（右）

です。お神輿さんや催し物に参加して一息入れるのに、地下足袋や草鞋を脱がずに庭先で食べたり縁側に座ったり、「誰でも入って一緒に食べまっし（一緒に食べていきなさいな）」って感じで、押し寿司、えびす、酢の物をちょっと食べる。そんなのが続いてきました。

昔は北前船にニシンとか昆布、材木を積んで宮腰（お宮さんと呼ばれる大野湊神社の腰元にあることに由来する金石の昔の呼び名）へ来ていたから、金石には昆布専門のお店があったくらい。寿司桶に前日からお寿司を仕込むんです。幅広の昆布と、アジ、サバ、タイなど魚の身と、酢で締めたご飯を昆布を敷いてお魚並べと3段4段と。寒天に生姜や卵を流す「えびす」も作ります。若い方が金石にお嫁に来て、お母さんがお年を召してお寿司を作らなくな

ると寿司桶の使い方がわからないんですね。「ストーンと抜ける、木の枠の蓋にもならん入れものがある」と、昔は大工さんに冬仕事で釘も使わないで作ってもらった、大事な道具なんですけどね。地元で伝わるお祭りの郷土料理の一つということで、お寿司の講習会を始めました。30年ぐらい毎年行っています。他の地域でも笹寿司はありますが、幅広の昆布を使用する押し寿司はなかなかないですよ。こんな贅沢な押し寿司珍しいわとイベントでも行列ができてすぐ売り切れてしまうくらい人気があります。

鶴山：何百年も続いている祭りには年齢問わず、強い関心を持つ人がたくさんいらっしゃいますね。金石の特色だと思います。昔の金石は漁師町のイメージがあったけれ

ど、漁業の人たち、とりわけ金石に住んでいる漁業者が減っています。その代わり地域のいろんな年代の人たちとなんとかやっ
ていこうじゃないかという機運はある。御興を担ぐための組織化を図ると結構応募者がいるんです。金石のこれからのいろいろな面でのまちづくり、地域のエネルギーを確保していく時に祭りは一番大事な仕掛けでしょうね。

祭りには人間に対する根源的な刺激があると思うんです。祭りになったらみんなテンションが上がって大変な熱気を感じます。

昨年(2022年)の5月の春祭りの時は、子どもたちも含めてすごい人でした。神社には能舞台があって、民謡や踊りなどこの町にある伝承芸能を守り育てるグループの方達が披露されています。神事能は40年以上続いているかな。金石宝生会の方たちを中心に謡をやるんだけど、毎年必ず行われています。金沢市の文化財保護課が認定制度を始めるから、金石の民謡や民謡会の活動を地域の宝と考えて欲しいと伝えています。多少の補助金やお墨つきといった活動の支援がないと、継承していくのは難しいのではないのでしょうか。有形無形のことをミックスして守っていくことにこの町の特色があると思っています。

能木場：金石町の民謡は、7つも8つもあるんですよ。夏の盆踊りを3日間にわたって開催した頃もありました。小学校のグラウンドに櫓を立てたり、空き地や広見(通りの途中にある火事の延焼防止や馬車の回転用の空地)でしたりと盆踊りの盛んな地域だったんです。それはたくさんの方が残っていて、歌の上手な方がたくさんい

らしたんですよ。盆踊りに行く時、目的地に着く手前から歌が聞こえてくるんです。「あそこのお父さんの声や」とわかるくらいに、金石の町の人はみんな歌の上手な方を知っていた。それがだんだん、開催が難しくなってきた。いろいろな歌があった中で、『銭五音頭』という銭屋五兵衛さんを称える歌もあるんですよ。昔は加賀の前田さんが船遊びにくるのに、殿様が乗る専用の御座船を漕ぐ船頭さんを御船出足軽と言ったんです。その御船出足軽さんが多く住んでいたところは御船町といって、昔は、今の東、西、主計町に匹敵するくらい、廓があったんです。北前船で全国各地から宮腰にいらして、一晚芸者さんをあげて楽しんだとか。ある時、銭五音頭を復活して欲しいが踊り方がわからないと言われて、実家の母が芸妓さんが銭五音頭を踊っていたな、と廓へ手伝いに来てた方を2、3人思い出して。公民館に来てもらって、銭五音頭の音楽を鳴らしたら、「ほらほらこんなやったわ」って踊れて、それで復活したんです。

金石民謡保存会は2007年に金沢市より金沢市民俗芸能伝習団体に認定され、唄と踊りを次世代へ継ぐため、活動しています。

鶴山：銭屋五兵衛は外に向けて経済的な交流を図ったけれども、どこの地域経済も交流しないと成り立ちません。町の在り方を考えると、金石は少し閉鎖的ですね。常に言われてきたけれど、外部の視点を入れる、場合によっては参画してもらうことが大事。金沢全体が城下町であり、百万石の文化を抱えているもんだから、実はプライドが高いのです。

「えんじょもん(金沢の方言で、遠方の人・県外出身の人)」って言葉があるでしょう。遠所者を遠ざけるような特性がこれまではあったかもしれないけれど、これからはそれでは地域社会が成り立ちません。交流人口や関係人口を増やして、外部の方々とも交流して刺激を受けましようと言われてますが金石もそうだと思うんです。次世代の人たちは、そうした意識を持ってほしいですね。地域の人たちを巻き込むことも大事けども、外部の目も意識して取り込んでいきながら、この町のあり方を考えていく。いろいろなことを申し上げたけれど、伝統的なものは地域のアイデンティティだから大事です。ただ、守っていただけでなく、新たな創造的なものを考えることも鍵じゃないかなと思いますね。全部を取り入れるのではなく、参考にしていくことは、大事だと訴えています。大野は外のものが少し入り込んでいるけれど、金石が一番そこが弱いですね。

コロナ禍で、町民の連帯感とか連携力、「やってみようじゃないか、地域の特色を活かそうじゃないか」という意識や意欲が弱くなっています。これは防災力などにも

つながるわけですから、地域のつながりを少しずつ戻しながら、町のエネルギーをもう1回引き出していくことをまずはやるべきだと思いますね。コロナも収束してきたから、今年にはぎわい広場の催しをやりようと思っています。いろいろな年齢層、団体が地域活動をしているので、その方たちが集まって運営をすると。簡単で、他の地域でもやるものかもしれませんが、金石は青年団、壮年会、婦人会、公民館、商工会と
いろいろな団体が町の規模にしてはたくさんありますから、それを大事にしていかな
いと。金沢全市の中でも、これだけの多くの団体が活動しているのは、珍しいでしょう。それらが複合的に絡み合っ
て、大きな地域活動になってくんだらうと思います。また、金銭の問題もありますね。お金は集めないと
いけません。私たちが協力していきますが、周りの理解を得ながらやっていきたいと思っています。

課題はたくさんありますが、1人では解決できません。能木場さんのような課題意識を持っている方が、それぞれの団体にいてほしいですね。そういった方たちにも継続的に投げかけていきたいですね。

金沢 21 世紀美術館

「自治区 金石大野芸術計画」

黒澤浩美

金沢21世紀美術館 チーフ・キュレーター

金沢21世紀美術館の開館準備期間に当たる頃、文化行政の分野で、盛んに頭上を飛び交う一つの言葉があった。「創造都市(クリエイティブ・シティ)」である。とりわけ、イギリス出身のチャールズ・ランドリー等の考察による文化と経済の融合による都市再生の事例報告はグローバル・インパクトとなり、2004年になると、ユネスコが7つのジャンル——クラフト、デザイン、メディア・アート、文学、映画、音楽、食文化の各産業において、世界で最も特徴のある都市を選定してネットワーク化するプロジェクトを開始した。長年にわたって金沢の文化行政を支えてきた「金沢世界都市構想」(1995年)はまさしくランドリーが上梓した『Creative City』と同年のことだ。ユネスコのクリエイティブ・シティのプロジェクトの開始は金沢21世紀美術館の開館に重なる。「クリエイティブ・シティ」とは、伝統的な産業社会から、情報やサービスなどの新しい産業に移行していく社会変動の波を受け、都市の資源と可能性を再評価しようというまちづくりを支えるコンセプトだ。金沢21世紀美術館のミッション・ステイトメントにある「21世紀という大きな歴史の転換点にあたり、新たなまちづくりへの対応が求められています。金沢21世紀美術館は、ミュージアムとまちとの共生により、新しい金沢の魅力と活力を創出していきます」とは、まさにこの「クリエイティブ・シティ」と共鳴している。

金沢21世紀美術館は社会の大きな変化に対して、金沢というまちの文化的資源を再評価しつつ、新しい価値の創造に結びつけるという考え方を文化行政の主軸としてきた。金沢市は美術館のみならず、町家保全や町名復活など、都市の力を再生させ、次世代につないでいくために、事あるごとに藩政期からの文化の力を信頼してきている。そのためには、人々が想像力を持って考え、計画し、行動し、チャンスを活かし、一見難題に見える都市の問題に取り組むことができるような状況を作り出すことが必要であるという環境整備に力が注がれたのだった。金沢には織

維産業にはじまる、ものづくりの伝統があり、430年以上にわたり戦災にも大きな災害にも遭わずに保全されてきたことも、歴史や伝統の継承を自覚するに十分な条件であり、文化資源をまちづくりに活かし、時代の転換点を乗り越えていくのは、歴史を継承「できるまち」ならではの、一つの責任でもあったことだろう。

その後、2009年に「金沢市都市計画マスタープラン」を策定。その中で「重点地区のまちづくり」として、藩政期からの都市構造を今に残す旧城下町区域を金沢市の都市機能の集積や賑わいの創出を図る重要な区域と位置づけ、合わせて駅西新都心のうち金沢駅西から金沢港に至る都心軸周辺を「金沢市集約都市形成計画」の都市機能誘導区域と定義した。前者のエリアには金沢21世紀美術館があり、後者のエリアには金石・大野がある。2009年は金沢21世紀美術館の開館から5年目、その後2015年に北陸新幹線開業と2020年に金沢港クルーズターミナルのオープンを控えた都心軸整備の準備の時でもあった。金沢21世紀美術館の「自治区」は2017年に開始。これらまちづくりの流れをふまえ、前者・旧城下町の広坂にある美術館から、後者の駅西新都心へと足場を移して「自治区 金石大野芸術計画」を立ちあげたというのが経緯である。

「自治区 金石大野芸術計画」の課題

アーティストやアートに関わるプログラムを「実行する」だけなら、おそらく多少の覚えがある人たちが寄り合えばできるが、それを地域に「実装する」となると話は別である。「クリエイティブ・シティ金沢」となるかどうかは、重要なステークホルダーである市民自身の振舞いと態度こそが重要であり、市民の創造活動の自由な発揮に基づいていなければ、本来は何事も始まらないはずである。「自治区 金石大野芸術計画」もまた、一過性のイベントやプロジェクトが「実行される」ことが目的化されていたわけではなく、元々は、アーティストを起点に創造を社会実装するところまでを金沢21世紀美術館が支援できるか、「クリエイティブ・シティ金沢」のマイクロ版として始動したのだった。「自治区」の事業は、美術館のミッション・ステイトメントにある「市民参画」に最も寄せた事業だが、開館以来、この「市民参画」は大きな課題だ。自治体が運営する文化施設の提供するプログラムは、ほとんどのケースにおいて市民は参加者に留まる。「参画」とは動機が必要であり、次に企画であり、それらを、出来れば丸ごと市民が「自治」できれば理想的な実装である。この過程に照らせば、「自治区 金石大野芸術計画」で最も参画と

自治が実現したのはアーティストの宮田明日鹿が始めた「金石手芸部」(p.58-) だったように思う。同様の意味で、金沢21世紀美術館が2008年に広坂で行った「アートプラットフォーム2008」においても、中村政人の「Kapo」のプロジェクトは市民参画と自治であり、ささやかながら可視化された実績として数えてよいだろう。「クリエイティブ・シティ金沢」とは、こうした創造の場が前景化されることであり、継続する中で価値が認められていくことなのではないかと考える。

創造をまちの力に

2000年代に入り、いよいよ身近に時代の変化を感じざるを得なくなったこともあり、国内の文化と地域を結ぶ活動は文化施設やその内側のプログラムのみならず、地方の芸術祭なども一層、参加者の自主性を促す形で発展を遂げてきた。公共、民間、コミュニティの各分野で創造性の発揮を奨励し、過程や結果を社会に実装することによって、都市が直面する課題と可能性を認めたアイデア・バンクに期待が高まっている。しかしながら、クリエイティブ・シティにおける創造性とは、単にアイデアを持つだけでなく、それを実行に移す能力も合わせて問われる。クリエイティブであるためには、アイデア、才能、創造的な組織を動員することができるように人材を見つけ、育て、維持する創造的な環境も必要だ。文化資源とは、人々の創造性を具体化したものであるので、建物などのモノだけでなく、景観、歴史的、産業的、芸術的な遺産——祭り、儀式、言語や料理など、時間をかけて蓄積された知財もある。これまでに金石・大野を訪れたアーティストは皆、地域の人々から有形無形の文化資源を受け取って作品やワークショップなど、クリエイティブであることが街の価値を高めるだろうとさまざまな挑戦をしてきた。創造都市の考えは「創造性」という言葉の乱用によって本来の意味を失い空洞化しつつあるが、「自治区 金石大野芸術計画」で含意する創造性とは、何かを創造してまちづくりに参画していきたいという人々の気持ちをうまくつなぎ、いずれは美術館を介さずにアーティストやクリエイターと地域の人々が直接に関係を持つこと、もっと自分たちらしさ、自分のアイデンティティや、コミュニティのアイデンティティ、さらにコミュニティを結びつけるものは何なのかということを考える機運が生まれていく、ということだった。実際のところ、これには長い時間がかかり、目に見えるまでには条件や環境の整備なども伴う。仮に金石・大野の人々が現状維持のみでなく、クリエイティブなまちとして再生して

いくという選択をすればしたら、如何に自分ごととしてリーダーシップを発揮していく人たちが集まって、継続的に活動していくことができるのかが問われることだろう。そして、その際には、創造的であると認識された人々だけでなく、一般的にクリエイティブから遠いと思われているような人たちの創像力や参加も促すことだ。彼らには地域のコミュニティへの帰属意識があり、誰よりもその土地の文化資源を知るので、オープンマインドと創像力を促進するための呼びかけに応えてくれれば、具体的な形になって実を結びやすい。そして美術館のような公的機関は、できるだけ自律分散型のコミュニティを支援していくことだ。投下型のイベントやプロジェクトで一斉に参加者を集めるのではなく、プロセスを共有しながら、何ができるかを協働して考えることこそが、地域と共にある文化施設の役割と考えるのである。

「自治区 金石大野芸術計画」を振り返れば、美術館の交流活動への寄与や存在意義を、今一度見直す契機になったこと、金沢の歴史・文化を尊重した共創が望まれていることなどを強く感じたことなどが思い出される。金沢が引き続き「クリエイティブ・シティ」を目指していくとしたら、美術館もまた、継続して共創の在り方を模索すべきなのではないかと思う。美術館が地域に暮らす人々とつながる次の時代への一歩として、活動記録を活用していただけるよう、本書を編んだのは、その理由もあつてのことである。

黒澤浩美 [くろさわ・ひろみ]

金沢21世紀美術館チーフ・キュレーター。ボストン大学(マサチューセッツ州、アメリカ合衆国)卒業後、水戸芸術館(茨城)、草月美術館(東京)を経て、2003年金沢21世紀美術館建設準備室に参加。建築、コミッションワークとコレクションの構築に関わる。2004年の開館記念展以降、オラファー・エリアソン、ホンマタカシ、ス・ドホ、フィオナ・タン、ジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラーなど、国内外で活躍する現代美術作家と作品を紹介。ミュージアム・コレクションの選定、小中学校連携や幅広い年齢の来館者に向けた教育普及プログラムも企画実施。







金石スタジオ

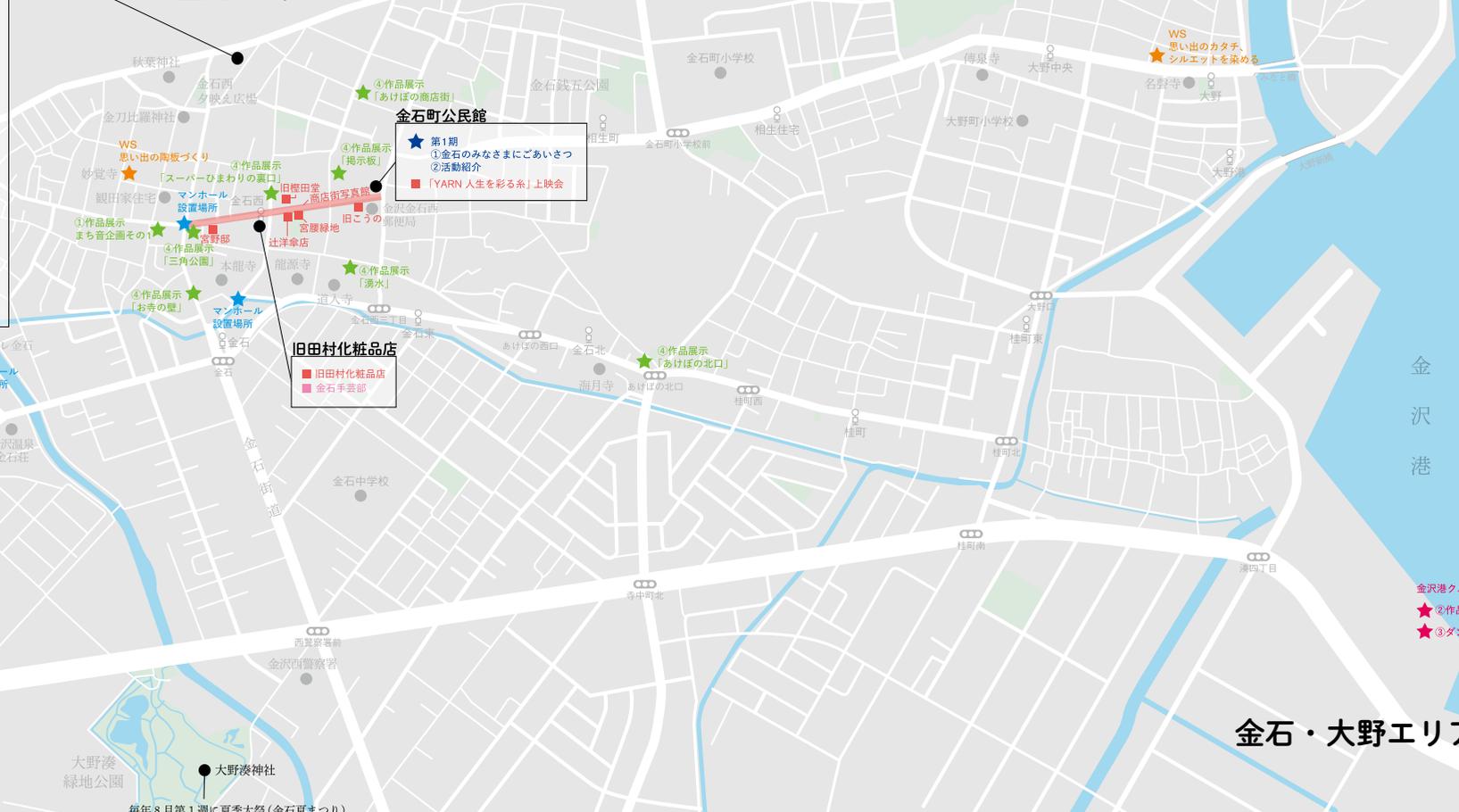
- ★ 第1期⑥金石スタジオまつり
- ★ 第2期
 - ①活動説明会
 - ②Discuvry in Kanaiwa ムネアゲ
 - ⑤活動報告会
- ★ ①ムン & チョンがやってきました!
- ★ ③中間報告会!
- ★ ④プロジェクト中間報告会
- ★ ②アーティスト・トーク
- ★ ④作品展示「郵便受け」
- ★ ⑤アーティスト・トーク
- ★ ④パフォーマンス映像「みぎわ」上映
- ★ ①アーティスト・トーク
- ★ ②金石ミニシネマプロジェクト～実験版～
- 聞き取り調査ワークショップ
- 「あなたのまちの使い方」調査報告会
- Vol.1 マチとハコとコトを考える
- Vol.2 データから見る「金石らしさ」とこれからの可能性
- WS漂流物ネームプレートをつくろう
- WS漂流物で何が釣れる? 浜どれ! グッドラックパーティ
- WSはま焼き! 「はま文武士器」を作ろう
- クリスマス・リースを作ろう
- 畑びらき
- 苗植え&ポットラックパーティ
- おすわけ市
- 01トークセッション〈岡昇平〉
- 02 WS〈海とまちと刺繍〉
- 03トークセッション〈新居幸治〉
- スターバックスコーヒー × 澁川テクニック
- 中島大河 窯焚き
- カワイの週末コンテナ
- カワイの週末コタツ
- 週末屋台

金石海岸

- ★ 第1期
 - ③益社との漂流物収集
 - ④漂流物と火を囲む
 - ⑤漂流物で楽器をつくる
- ★ 第2期
 - ②Discuvry in Kanaiwa ムネアゲ
 - ③Discuvry in Kanaiwa 踊る家
 - ④Discuvry in Kanaiwa 漂流マーケット
- ★ ②作品撮影
- WS漂流物ネームプレートをつくろう
- WS漂流物で何が釣れる? 浜どれ! グッドラックパーティ
- WSはま焼き! 「はま文武士器」を作ろう
- クリスマス・リースを作ろう
- 02 WS〈海とまちと刺繍〉
- かないわ屋外写生会

金石エリア

大野エリア



- ★ スタジオができる前の活動
- ★ AIR 1 田口行弘
- ★ AIR 2 ムン&チョン
- ★ AIR 3 魚住哲宏 + 魚住紀代美
- ★ AIR 4 Co.山田うん
- ★ AIR 5 村上 慧
- ★ 東京理科大学活動
- はま部
- にわ部
- まち部
- 楽座
- その他活動
- 神社/目印
- バス停

- 金石港クルーズターミナル
- ★ ②作品撮影
- ★ ③ダンス公演

毎年8月第1週に夏季大祭(金石夏まつり)などが行われています。

毎年7月第4週に金沢三大祭の一つ山王祭が行われています。

金石・大野エリア地図

自治区 金石大野芸術計画 年表

		AIR	PP
2018	9		
	10	AIR 1: 田口行弘 (第一期) 滞在	
	11		
	12	AIR 1: 田口行弘 (第二期) 滞在	
		金石スタジオ開始	
2019	1		
	2	AIR 2: ムン&チョン (第一期) 滞在	
	3	AIR 2: ムン&チョン (第二期) 滞在	
	4		
	5		
	6		にわ部: 畑びらき
	7		ポットラックパーティ
	8	AIR 2: ムン&チョン (第三期) 滞在	まち部トーク
	9		はま部ワークショップ
	10	AIR 3: 田中行弘&キアラ・チッカレロ (第一期) 滞在	カワイの週末コンテナ
	11		まち部トーク
	12		はま部 にわ部ワークショップ
2020	1		
	2		カワイの週末こたつ
	3		
	4		
	5		
	6	AIR 4: 魚住哲宏+魚住紀代美 (第一期) 滞在	
	7		
	8	AIR 5: Co.山田うん滞在	週末屋台
	9		

		AIR	PP
	10		はま部ワークショップ
	11		
	12		
2021	1	AIR 6: 村上慧滞在	週末屋台
	2		
	3		
	4		
	5	AIR 4: 魚住哲宏+魚住紀代美 (第二期) 滞在	
	6		
	7	かないわ楽座	
	8		
	9		
	10		
	11		東京理科大伊藤研究室 調査
	12		
2022	1		カワイの週末こたつ
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		東京理科大 ディスカッション
	7		
	8		東京理科大 ディスカッション
	9		
	10	金石スタジオ 地域の方へ引き継ぎ	

謝辞

本事業開催にあたり、多大なるご協力を賜りました関係者・関係機関の皆様、またここにご紹介をしきれない方々も合わせて深く感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

新居幸治
いしかわひろき
石原啓行
伊藤香織
今村吉郎
上原聡子
魚住紀代美
魚住哲宏
ウシジマキナミ
ウシジマタイヨウ
ウシジマヒトシ
内田望美
内田 涼
梅原 顕
オーギカナエ
大倉慶乃助
大西 匠
岡 昇平
桶 照子
呉 夏枝
尾山政昭
笠井義孝
角島 泉
河崎智洋
カン・タムラ
観田康宏
キアラ・チッカレッコ
菊谷達史
北村陽子
経田泰夫
栗林祐輔
鴻野勅二郎
コースケ (コイノボリ食堂)
小坂保行
Co.山田うん
紺田健司
齊藤紀子
坂本一水
櫻井茂宏
桜井輝美
zAk
佐野弘直
澤野紀美子
塩谷美馨
住駒充彦
瀬戸康裕
Darsana Belly Dance Mii
高 知子
高柳誠也
田口行弘
工 美里
田村くに子

千川岳志
チョン・ジュンホ
辻 寿美恵
鶴山秀二
鶴山庄市
鶴山雄一
Digital Sound KENSIX
寺尾賢右
戸出雅彦
中永勇司
中島大河
中谷瞳子
中村清夏
中村 彩
鍋谷有介
能木場由紀子
林 雄一郎
林 吉三
原 瑠璃彦
番匠由美子
番匠博和
藤條虫丸
MATABE
富田明日鹿
宮野榮子
mmtia KUMI
村上 慧
ムン・キョンウォン
矢部慎太郎
吉野大地
吉野善正
吉村安司
淀川テクニク
米田志津子
渡辺秀亮

あけぼの商店街
石川県漁業協同組合
石川県銭屋五兵衛記念館
うねだや
NPOかえっこまるびい
(株) 益進
益社会
尾山自転車商会
大野湊神社
沖書店
加賀建設 (株)
樫田堂
金石児童館
金石商工会婦人部
金石手芸部
金石宝生会

金石の歴史を知る会
金石町校下町会連合会
金石町公民館
金石町商店協同組合
金石町伝承芸能振興協議会
かないわものづくりサポーター
かなラボ
(株) 観田創建
旧とりのい洋品店
(株) ケイエヌビー・イー
(株) 四緑園
スーパーひまわり
(株) スーパーファクトリー
スターバックスコーヒー金沢百番
街Rinto店
(株) ダイドー
タニヤン
田村化粧品店
鶴山陶器店
東京理科大学 伊藤研究室
なっちゃん
鍋喜醤油 (株)
にわ部
BAR 満月喫茶
はいからさん
船木屋
本龍寺
まるびいみらいカフェ
(株) ミヤシタホーム
みやのこしこまち
妙覚寺
未来link
めん房なかもと
安野酒店
山名造園 (株)
よねだ生花店

金沢21世紀美術館サスティンメンバー

株式会社アドバンス社
株式会社グランゼーラまつだ小児科クリニック
公益財団法人高岡市勤労者福祉サービスセンター
SANAA事務所
米沢電気工事株式会社
ナカダ株式会社
株式会社福光屋
アルスコンサルタンツ株式会社
金沢市農業協同組合
ヨシダ宣伝株式会社
金沢信用金庫
株式会社総合園芸
西日本電信電話株式会社金沢支店
株式会社ヤギコーポレーション
株式会社北園銀行
一般社団法人金沢建設業協会
しま矯正歯科
ニッコー株式会社
協同組合金沢問屋センター
一般社団法人MuU
三谷産業株式会社
医療法人社団 健康会 耳鼻咽喉科安田医院
株式会社メープルハウス
株式会社マイブックサービス
公益財団法人金沢勤労者福祉サービスセンター
スーパーファクトリー
株式会社エイブルコンピュータ
金沢中央農業協同組合
株式会社浦建築研究所
林橋舎アップルカンパニー
ホクモウ株式会社
前田印刷株式会社
株式会社インプレス美術事業部
株式会社バルデザイングループ
金沢ターミナル開発株式会社
金沢セメント商事株式会社
株式会社 あまつぼ
株式会社とむろ
カナカン株式会社
シクアドクライス株式会社
医療法人社団映寿会
株式会社鍛冶商店
ArtShop 月映
べにや無何有
株式会社 大和
株式会社ユニークポジション
OMO5金沢片町 by 星野リゾート
株式会社道洋行
能登印刷株式会社
イワタニセントラル北陸株式会社
株式会社金沢商業活性化センター
株式会社ほくつう
株式会社北都組
株式会社橋本確文堂
ケンブリッジフィルタコーポレーション株式会社
合同会社 鮎 みつ川

坪田 聡
金沢市一般廃棄物事業協同組合
金沢商工会議所
株式会社竹中工務店北陸営業所
一般社団法人石川県鉄工機電協会
株式会社うつのみや
株式会社橋本清文堂
日機装株式会社
株式会社計画情報研究所
株式会社ビー・エム北陸
石川県勤労者文化協会
ヨシダ印刷株式会社
公益社団法人金沢市医師会
株式会社アイ・オー・データ機器
横河電機株式会社金沢事業所
有限会社美蓉グリーンサービス
一般社団法人石川県繊維協会
株式会社コネル金沢
河野陽子
BE HERE NOW
連合石川かなざわ地域協議会
株式会社金沢環境サービス公社
アムズ株式会社
ヨシダ道路企業株式会社
株式会社金太
北陸スカイテック株式会社
辻商事株式会社
未広フーズ株式会社
株式会社日本海コンサルタント
石川県中小企業団体中央会
高桑美術印刷株式会社
株式会社浅田屋
北菱電興株式会社
株式会社甘納豆かわむら
アズビル株式会社
株式会社四緑園
株式会社ホクスイ
大村印刷株式会社
株式会社中島商店
北陸名鉄開発株式会社
株式会社五井建築研究所
株式会社金沢舞台
石川県ビルメンテナンス協同組合
横浜エレベータ株式会社
株式会社グッドフェローズ
日本海警備保障株式会社
株式会社かゆう堂
株式会社山田写真製版所
森平舞台機構株式会社富山出張所
アイバブリッシング株式会社

(2023年2月現在)

自治区 金石大野芸術計画

期間：2018-2022年度

主催：金沢21世紀美術館 [公益財団法人 金沢芸術創造財団]

助成：平成30年度文化庁「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」
令和2年度自治総合センター「地域の美術環境づくり助成事業」

[金沢21世紀美術館]

黒澤浩美

中田耕市

野中祐美子

池田あゆみ

木村 健

森 絵里花

初倉梢恵

青木邦仁

[地域コーディネーター]

門阪翔大

鈴木葉菜

河合紗那

板橋菜里

堀江紀子

渡辺秀亮

菊谷達史

中島大河

[インターン]

有原千尋

柴田千帆

[自治区ラジオ]

office BLANCA

自治区 金石大野芸術計画 記録

執筆：伊藤香織、黒澤浩美

中田耕市 [NK]、野中祐美子 [NK]、森絵里花

編集：森絵里花、米津いつか

デザイン：菊地敦己、秋元桜（菊地敦己事務所）

発行日：2023年3月31日

発行：金沢21世紀美術館 [公益財団法人 金沢芸術創造財団]

印刷：株式会社 山田写真製版所

ISBN: 978-4-910864-07-5

禁無断転載

©The artists ©21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

All rights reserved.

